

# 婦人と子の本

第一五  
號卷

詳 告

會 告

本誌は、婦人教育及家庭教育、其他緊要なる各種の問題に關して、讀者相互の質疑應答を掲載す、但讀者の應答なき時は、記者之に應するものとす。本誌は一般讀者の寄稿を歡迎す。殊に家庭の日誌、各地に於ける婦人教育、幼兒保育の状態、婦人問題、婦人兒童の遊戲、手越歌、子守歌等に付いては、詳細なる報告を望む。但質疑投稿は、凡て左の規則によるべし。

一、用紙は、白紙二つ折、字詰は、半枚十

行廿二字詰、體は楷書。

一、一事項毎に別紙を用ひ、別口に住所

氏名を記入せらるべきこと。

一、原稿は、一切返附せざること。

一、封書の表には、凡て婦人と子ども投

稿と明記せらるべきし。

一、投稿にして、有益と認めたる時は相

當の謝意を表することあるべし。

一、照回は往復はがき又は返信用切手封入のこと。

本會に御入會なされんとする方は、會則にある通り會費は一ヶ月金拾錢ですから、其割合で女子高等師範學校附屬幼稚園内フレーベル會へ向け何ヶ月分か纏めてお納めの上、申込まれると、雑誌は當會から無代價で御送附します。會員にならないで、たゞ雑誌だけ買って御読みになりたい方は、日本橋區本石町三ノ廿三金昌堂へ御注文下さい、一冊拾錢六冊前金五拾七錢十二冊前金一圓拾錢他に郵稅が一冊一錢づゝの割合です。

明治三十八年一月二日印刷  
同 年一月五日發行

發行兼編輯者 東京市麹町區飯田町四丁目十二番地  
不許印 刷 者 東京市神田區錦町一丁目十九番地  
復製印 刷 所 東京市神田區錦町三丁目二十五番地  
發行所 女子高等師範學校附屬幼稚園内  
發賣所 東京市日本橋區本石町三丁目十三番地  
昌 堂

大賣捌所 東京 東京堂 同東海信文合會會社 同北隆館  
金

# 謹しみて

## 新年

を賀し併せて

會員諸君

の萬福を祈る

明治卅八年一月一日

婦人と子とも編輯委員

## フレーベル會規則

- 第一條 本會ハ幼兒保育ノ改良發達ヲ圖ルヲ以テ目的トス
- 第二條 本會ハフレーベル會ト稱シ東京ニ置ク
- 第三條 會員タラントスルモノハ幼稚園ニ關係アルモノ又ハ幼兒保育ニ篤志ナルモノニシテ會員ノ紹介ヲ經ベシ
- 第四條 會員ハ本會ノ經費トシテ一ヶ月金拾錢ヲ醵出スベシ
- 第五條 令聞名望アル人ニシテ本會ノ事業ニ裨益アリト認ムルモノハ特ニ請ヒテ客員トナスコトアルヘシ
- 第六條 本會ノ目的ヲ達セんガ爲ニ左ノ事業ヲ行フ
- 一 總會 每年四月二十日之ヲ開キ保育ニ關スル演説、談話、研討會、品物展覽會、會務ノ報告幹事ノ選舉等ヲナス
- 二 保育ニ關スル演説、談話、協議、實驗等ヲナス
- 三 組合會 會員中特ニ或ル事項ヲ研究セントスル者ヲ以テ組織ス
- 四 前項ノ外本會ノ目的ニ裨益アリト認メタル事件
- 五 雜誌發行会規約ヲ定メテ會長ノ承認ヲ經ルモノトス
- 六 前項ノ外本會ノ目的ニ裨益アリト認メタル事件
- 第七條 本會ニ左ノ役員ヲ置ク
- 一 會長 一人 會務ヲ總理ス
- 二 幹事 一人 會長ヲ輔佐シテ會務ヲ掌理ス
- 三 幹事 十人 會長ノ指揮ヲ受ケ會務ヲ分掌ス
- 四 評議員 若干人 重要ナル事件ニ關シ會長ノ諮詢ニ應ス
- 五 第八條 會員ハ容員中ヨリ推薦スルモノトス
- 六 第九條 主幹ハ會長ノ特選トス
- 七 第十條 幹事ハ會長ノ互選トス
- 八 第十一條 但シ毎年半數ヲ改選スルモノトス  
トアルベシ
- 九 第十二條 本會ハ必要ニ應シ特ニ委員ヲ設ケ又ハ書記ヲ雇入ルゝコ
- 十 第十三條 本會ハ會員三分之二以上ノ同意ヲ得ルニアラザレバ變更スルコトヲ得ス

女子高等師範學校教授 黒田定治先生 同校教授 東基吉先生 共著

新刊

# 女子實踐教育自學

定價五十五錢  
郵稅一冊六錢  
製本頗優美

教育學書の刊行せらるゝもの頗る多し。然れども特に女子用の教育學書に至りては甚だ少し。本書は多年女子高等師範學校に在りて教授の任に當らるゝ兩先生が今回女子用教科として適切ならしめんがため特に小店の需に應じて執筆せられたるものにして先づ筆を一般教育の理論より起して心理學の應用に及び以下家庭教育、幼稚園保育、學校教育と順次明瞭平易に説述せられたるものにして殊に家庭教育、幼稚園保育の如き最も詳密を極めたれば、女子教科として極めて適切なるのみならず、一般女子の教育學を學ばんとする人に取りても無二の良書といふべし。

目黒商店

東京市京橋區南傳馬町二丁目五番地

# 婦人と子ども第五卷第壹號目次

## 卷首

外人の見たる日本幼兒の海軍思想養成

## 子ども

蛙と指環

牧羊

一

正月のお遊び

をきな

七

お多福の集會

林天然

一九

音楽會

その子

三

## 婦人と子ども

第五歳を迎ふ

牧羊

三〇

外人の見たる日本幼兒の海軍思想養成

三一

家庭とは何ぞや(答を募る)

三四

小兒の病氣につきて

三五

貞一の日記

その母

三六

## 保育者のため

行進遊戯につきて

中村五六

三七

予が幼稚園

市川源三

三八

神戸出征軍人遺族兒童保管所實況

榎本常吉

三九

大阪の保育界

吉田

四〇

## 会報

吉田

家庭に於ける所感

飯塚忠次郎

四一

若菜籠

其子

四二

割烹

右井泰次郎

四三

新年歌

子吾後

四四

新年山

東基吉

四五

夜の思

林壽祐

四五

フレーベル會俳句端書集

鹽野奇零

五六

ハイクナツノル

ヒライハガクヨー

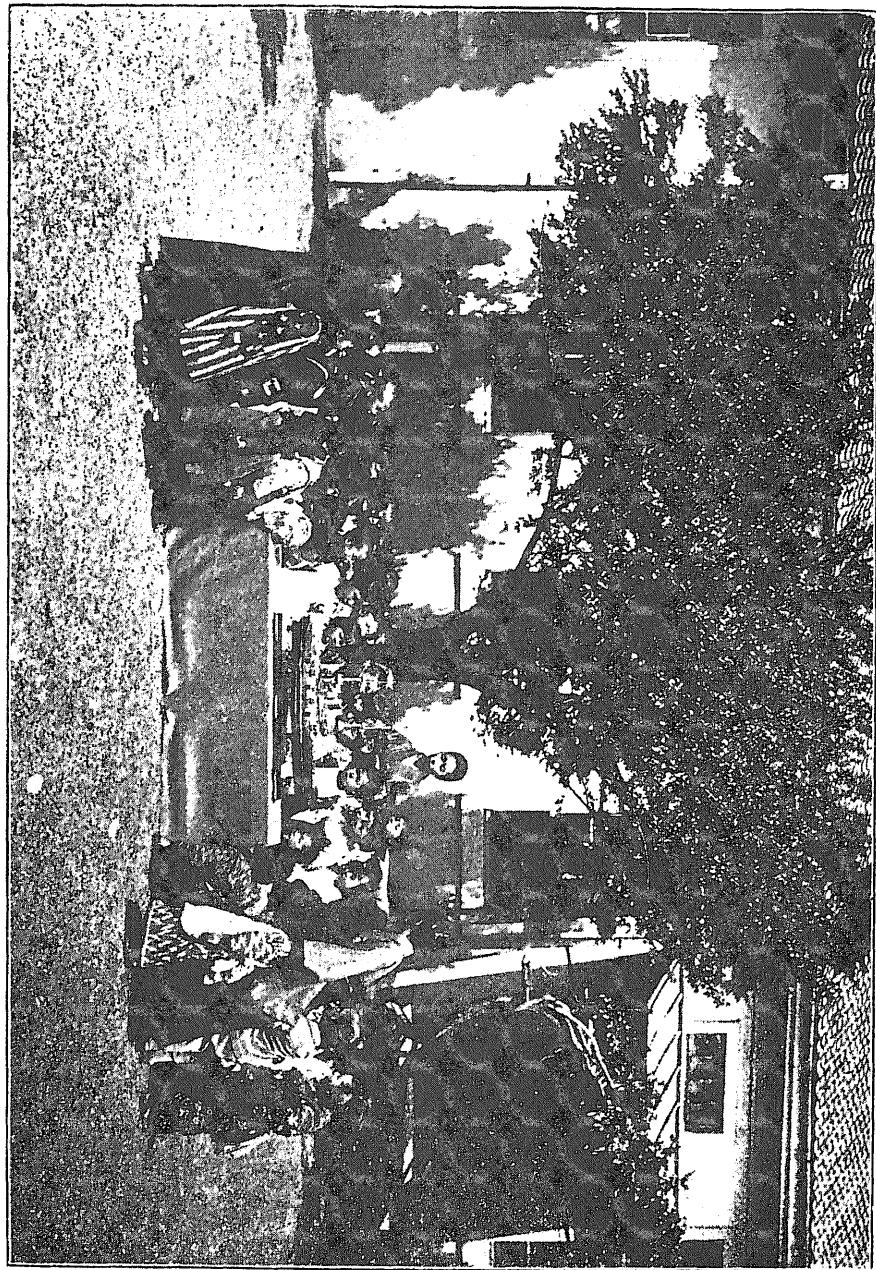
五六

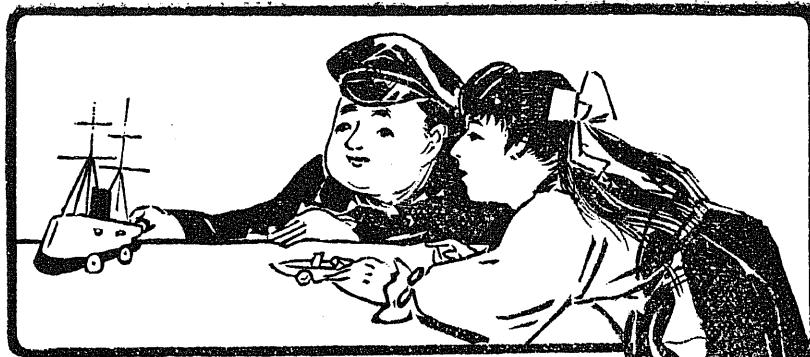
白菊

スミレ會

六一

成養思軍海の兒幼本日るた見の人外





# もど子と人婦

## 號一第一卷五第

蛙と指環

(クリムのお伽話)

牧羊譯

むかし、ある國の殿様に一人のお姫様がありました。ある暖い日お一人で、御庭の池の側に出て、ふだんから大切にして居る金の指輪を、おもちゃにし





て遊んで居られたのですが、どうした具合でしたか、其指環を側そばの池の中へころがらせて仕舞ひました。

さあ、お姫様は吃驚して

一オヤ 仕舞つた

と仰つて、いきなり、立つて池の中をのぞいて見ましたが、指環は、深い池の底に落ち込んで仕舞つたものと見江て、影も形も見江ません、お姫様は恨めし相に、しばらくじっと落ち込んだと思ふあたりの水の上を眺めて居らしつたが、どうしたつて、出てくる筈もありませんから、とうく悲しくなつてしまつて、聲を出して泣き出しました。

そうして居ると、どこからですか

「お姫様なぜ、そんなに、涙を流して泣いておいでですか」  
 といふ聲がしましたから、お姫様は、不思儀に思つてひょいと、  
 頭を擧げて聲のした方を見ると、一四の蛙が、ひょうこり、水の中  
 から、頭を出して居ます。

姫「あら、いやな蛙だこと、お前かい、今物いったのは? 私はね  
 たつた今、大事のく指環をなくしつしまったから、もうどうし  
 ようと思つてかなしくつてく仕様がないの。」

蛙「お姫様、そんな事なら、お泣きにならなくつても、私は今すぐ  
 取つてきて上げましよう。」

姫「まあ、お前、眞實にとつて來てくれるのかい、そんなら、私ど  
 んなに嬉しいか知れないわ。」

姫「けれども、私はとつて來ましたら、お姫様は、何を下さいますか」  
 あれさへ取つて來てくれることなら、何でも上げるわ、私の帽子でも、腕環でも、そうく此お正月におつかさから買って頂いた大事の花籠でも、もう何んでも

姫「あの、私、そんなものは頂いても仕様がありませんから、何んも欲しくはありませんが、どうかお姫様の友達にして下さる事は出來ませんか、そうして、毎日、一所に遊んで頂いて、御飯も一所に食べて、お寝みの時も一所に寝かして下さいましたな、え、ようございますか。」

姫「それは、もう、あれさへ取つて來てくれれば、何でも、お前の思ふ通りにして上げるよ。」

と仰<sup>あお</sup>やつて見たが、心の中では「なあに、これは蛙<sup>かず</sup>じゃないか、お池<sup>いけ</sup>の中に居<sup>ゐ</sup>るんだもの、御殿<sup>ごてん</sup>へ来て、私<sup>わたくし</sup>と一所<sup>ひとしょ</sup>に御飯<sup>ごはん</sup>を食<sup>た</sup>べきでくれなんて、可笑<sup>かわ</sup>しい事をいふよ、蛙<sup>かず</sup>なんかに、そんな事がどうしたって出来るものか」と思<sup>おも</sup>つて居<sup>ゐ</sup>らっしゃいます。

姫けれど、お前<sup>まへ</sup>、眞實<sup>ほんじ</sup>に、指環<sup>ゆびわ</sup>がとれるのかい、まあ、こんなに水<sup>みず</sup>が青く<sup>あ</sup>つて、深いのよ

といひますと、蛙<sup>かづ</sup>は

「なあに、深いたつて、私のお家<sup>わたくしのいえ</sup>なんですもの」

といふかと思<sup>おも</sup>ふと、いきなり、頭<sup>あたま</sup>を水<sup>みず</sup>の中につつこんで仕舞<sup>しは</sup>いました。お姫<sup>ひめ</sup>様<sup>さま</sup>は、どうなる事かと思<sup>おも</sup>つて、じつと見て居<sup>ゐ</sup>ると、しばらくすると、指環<sup>ゆびわ</sup>は口にくわへて、又ポカンと頭<sup>あたま</sup>を出して來<sup>き</sup>て

「さあお姫様」といって岸の上へ其指環をほうり出しました。

「あらまあ」

といつたきり、お姫様は、もう嬉しくってくいきなりとつて左の中指にはめて、「蛙さんありがたうよ」といつたきり、後を見ないで御殿の方へ走りかけました。すると、後の方から

「あ、もしく、前の約束じやありませんか、どうぞ、私も一所に連れて行つて下さいまし、そんなに早くつては、私はとてもついて行けませんもの

といつて、一生懸命に呼んで居ります。夫れでも、お姫様は聞こ江ない風して可愛相に、其儘、すたくとかけて行つて仕舞ひました。

夫から、晩方になつて、お姫様は、お父様やお母様と一所に御飯をめし上らうと思つて、お膳の前に并ぶと、障子の外で、何だか、ピヨコリ、ピヨコリといふ音がします。皆、何の音だらうと聞いて居ますと、小さいく聲で「お姫様、どうか一寸こゝを開けて下さいまし」

といひましたから、お姫様は誰が來たのだらうと思つて、何心なく立つて行つて障子を開けてやりました所が、前つきの蛙が、ちゃんと行儀よく障子の外に兩手をついて居ましたから「ハツ」と思つていきなり、又ピシャーリと障子を閉て切つて、御膳の所へ戻つて来ましたが、お顔の色は眞青になつてぶるく慄へてお出でになる。

お父様は、其様子を見て、

父みやまあ、どうしたのだ、お化けでトモもあつたのか、そんなに慄ふるへて居ゐるのは

姫ひめいーは お化じやないのだけども いやーな蛙かえるが來きて居ゐるんで  
すもの 真實ほんとうに私わたし 蛙かえるなんか 大嫌だいかい！

といつてまだぶるく 慄ふるへて居ゐます、するとお母様おはなさまは側そばから  
「夫おとこで、其その蛙かえるが何なんかお前に用用があるとでもおいひなのかい」  
と尋たずねましたので、お姫様ひめさまは、今日きのう畫ゑあつた事をことお咄なしして、

「あんまりね、私の友達ともだちになりたいくつてせがむもんだから  
私も指環わなわいをとつてくれさへすれば してやるといつて約束やくそくした  
の、けれども、蛙かえるなんか、お池いけの中なかに居ゐるんですもの、とても外ほか  
に出てでくる氣遣きづかいはありやしないと思おもつたのよ、そうすると、今いま

ちゃんと、こゝに来て居るから、私、眞實にいやになつちまつたのよ」

といつてお話して居ると外では又、小さな聲で

おひめさま おひめさま

さつきの約束

おわすれか はやくこゝ

あけて頂戴

といつて歌つて居ります。

すると、お父様は

「お前、約束した事なら 其通りしなけりゃいかんじやないか、

さあ、早く行つて開けておやり

と仰しゃるもんだから、お姫様も仕方なしに、立つて行つて障子

を明ておやりになると、蛙はすぐピヨコリとお座敷に這入つてき

て、ちゃんとお姫様の側に坐つて居ましたが、さあ、御飯を召し上らうとすると

蛙お姫様、どうぞ、お膳の上に私を上げて下さいまし、あんまりお膳が高すぎますから何も食べられないんですね

といひますから、又仕方なしにお膳の上に上げてやると蛙は、ピヨヨ／＼跳び回はっては、お姫様のお皿の中の御馳走など戴いて嬉しがつて居ます。けども、お姫様を始め、他の人等は「なんだか、きたならしい」と思つてしきりにいやがつて居ります

暫くすると、今度は

蛙あの　お姫様、私、もう眠くなつたから、どうか　お二階の、

お姫様のお部屋へつれてつて下さいませんか、そして、お姫様

のお寝床の中で寝させて下さいました

といひます。

お姫様は、それを聞いて、もうつらくなつて仕舞つて、涙をぼろ／＼流して居ります。「なんだつてこんな、穢い蛙を、私の奇麗な床の中へ入れることが出来やう、夫に、こんなに冷たい身體なんかで触られては」と思ふもんですから、いやで／＼仕方がないのです。すると、お父様は又

「お前、自分のつらかった時だけ助けてもらつて置いて、今になつてから、いやな風などしてはいけません

と仰しるので、お姫様も仕方なしに、一本の指で蛙をつまんで、お二階へ上つて行つて、部屋の隅の方へ、そーっと置いてやつ

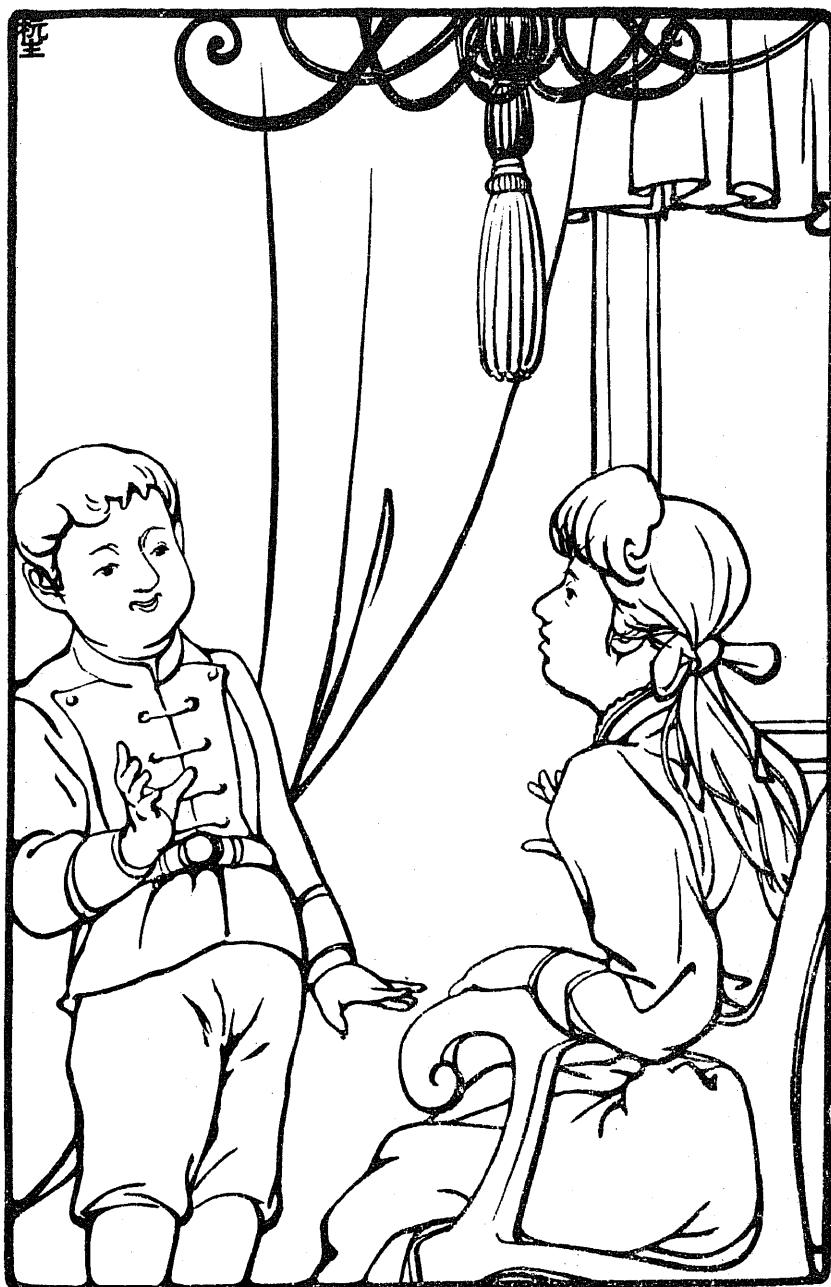
て、御自分は、すたくお布團の中へくるまつて仕舞ひました。すると蛙は

「お姫様、私、眠くつて仕様がなし、夫に寒くつてく堪りませんから、どうか、其中へ入れて下さいまし。それでないと、私は下へおりて行つてお父様に言ひつけますよ

と言ひましたから、今度はもう、お姫様も怒つて仕舞つていやだつたらいやだよ、眞實に、蛙の様な穢い、冷たいものなんか、誰が入れてやるもんか、寒いつたつて、冬でも水の中に居るじやないか、ほんとに生意氣な蛙だよ

といつていきなり起きて来て、蛙をつまむが早いか、壁を目がけて、力一ぱいになげつけてやりました。しますと、蛙はいきなり、

望



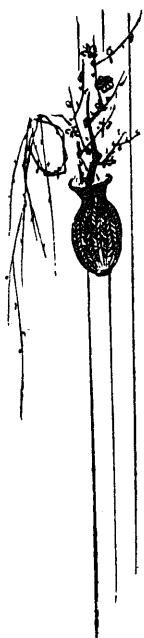
ギヤッといつて死んだと思ふと、忽ち、そこへ可愛いらしかったらない位の、男のお子が出て来て、大へんお姫様に御禮をいつて申しますには

「もと、私は、此國のお隣りの殿さまの子どもでしたのですが、ある時、少しの惡い事をした故に惡魔の爲に、蛙にせられて永い間、お庭の池ですむ様にせられました。夫で、もとの身體になるにはどうしても、お姫様の力でなければならぬといふことでしたが、不思儀と、今日、指環のことから引き上げて頂いて、とうくもとの身體になつて、こんな嬉しい事はございません」

といひましたので、お姫様も吃驚して、お父様に、その通り申し

上げるとお父様は、大層喜んで、幸ひ男の子がないから、お隣りの國へ そういってやつて、此お子を貰はうといふ事になつて、と  
うく此御子は、こゝに貰はれて、夫から、此お二人は、大層お仲よしのお友達になりましたとさ。

めでたしく



## 正月のお遊び

ふきな

學校も、幼稚園もお休だし、お父さんも、お母さんも姉さんも兄さんも、皆さんが家に入らつしやるし、さあ、何して遊ばうか知らん……こんなお遊びはどうでしよう。

問ひ落し

皆が甲乙の二組に分れて、兩方からお甲ちゃんと乙次郎さんと一人づゝ子供を出す。お甲ちゃんと乙次郎さんは外へ出て、二人で相談して何でもよいから一つの物を考へて又お室へ這入つて来て、そして甲組から出たお甲ちゃんは、乙組の方に、乙から出た乙次郎さんは甲組の方へ行く。すると、乙組の人は甲ちやんに、甲組の人は乙次郎さんに向つて何を考へて來たのかを問ひ當るのです。

名盡し

二三人寄つて、木なら木、魚なら魚の名盡しを始めます。先づ木盡しで申しますと、一人が松といへば、次が梅、次が櫻といふ風に、そしてだんづと言つて仕舞つて、仕舞に木の名が言へなくなつた人は何か罰を受けるといふ風にするのです。

ホワイト、ゲーム。

これは、前の二の様に、一寸は教へられないんですが、お正月のこつたから、大負けに負けてお敷へ申しましようか。

そして、甲組の人が、乙組よりも前さに問ひ當てたら、乙次郎さんを、甲組の方へ取つて仕舞うし、又乙組が前さに問ひ當てたら、お甲ちゃんを乙組に取つて仕舞ふ、そして又更に、兩方の組から、人を二人出して、始めます。

先づ、遊ぶ人が五六人あるとして、一人が外へ行つて隠れて居ます。其間に、残つた人が皆で相談して、其人が二度目に這入つて來た時、問ふものを決めて置く。そこで、夫が決つたとする、（何でも宜し、其のお室にあるものなら、例令ば、こゝでは、火箸と決めたとして置きましよう）さあ、よしと相圖をすると、前の人気が其座へ戻つて來る。そこで、先づいって置きますが、此隠れた人と、夫から、残つて居る人の中で一人問ふ人とは、此遊戲の秘訣を知つて居るのですよ。そして、つまり他の人をござかさうといふのです。

さて、隠れた人が其處へ戻つて來て、さあわてまして、といふと、残つて居た中で一人問ふ人が、そこへ出て聞きます。何からでもよし、例令ば、ここにある本ですか（答い一え）夫では、鐵瓶です

が、（答い一え）ランプですか（答い一え）此白紙ですか（い一え）此火箸ですか（左様）といつて當ります。勿論、隠れて居たのだから、火箸ときめたのを知らう筈もなし、又問ふ人が、前以て火箸を決めるよといつて置いた譯でもありませんから、他の人は、皆不思儀に思ひます。

夫なら、も一度といつて、前に隠れた人を二度外へ出して置いて、あとで何か決めて置いて、よしといつて呼び入れて、再び、前の問手が、じゅん／＼に、其邊のものを問うて行つて、終はりに、夫では、美ちゃんの白い前掛ですかと問ふ、い一えと答へる、次に何か決めて置いたものを問ふと、今度は、夫ですといつて言ひ當てる。そこで、残りの人は、尙更、不思儀に思ひます。

然しこゝまで、申しますと、皆さんは、「はあ分つ

た」と大概は御了解になつたと思ひますから此手品の種は、申し上げる必要がないかも知れませんが、念の爲めに、一應説明して置きませう。

つまり、これは、問人と問はれる人との間に以

前から、チャーンと内約があつて、だんく問ふて

行く中に、こちらで決めて置いたものを見らせる

工夫してあるので、ホワイト、ゲーム（白遊び）

といふのは、そこから取つた名です。即ち、そこ

いらに在るものと、片端から問ふが、皆い一えと

答へる。そして、今度何か白いものを聞いたら最

後、其次に問ふものが、即ち決めたものだといふ

ことを二人で前から決めて置いて在るものです。

だから、他の知らない人に問はれては、とても答へる譯には行かぬのであります。

いつて見ると、詰らないですが、まあ二人で一つや

つて御覽なさい、きっと、他の人は吃驚しますから。  
まあ、之丈にして置きませう

### お多福會

林 天 然

ある年の正月、どこかで福々しい大勢のお多福さんが、お芽出度も親睦會を催しました。時は

一月の第一日であつて、寒いにも寒いにも肌を裂

くといふ、極々寒い時節であつたけれども、宇宙

萬象皆新まるといふ時ですから皆んなニコニ

顔、愉快の外には何にも無い、慾もなければ智慧

もない、嫉妬もなければ心配もない、誰一人ブツ

ツラするものはありません、で當日は午前十時から皆タブ〜と出掛けました、来るお多福も来る

お多福も、もう皮一ぱいに肥えて居る、何んでも

恵比須様か大黒様の血統でありましょー。何れも  
醤油樽にたがといふみえである、樽に大樽小樽わ  
り、お多福の中には身の丈の六尺にも達せんとし  
てる大お多福があれば中には亦ほんの三尺許りで

圓々として豆お多福がある、小さひ二王様の所

へ、お嫁にいッたら、さぞ似合ひましょー。其他  
梶子の様なもの、芝草の様なもの、色々なお多福  
が参った、やがて宴會が開かれて大野お福さんとい  
ふ方が、開會の主意を述べます、そして、寒い時  
ですから、甘酒を熱くわかして、コップへ注いた、  
酷く熱いもんですから、何れも頬をブクリンと膨  
らかし、フウ〜と吹きながら飲んだ、二杯飲む、  
三杯飲む、宴會も酣となりました。

『アタイが注ぎましょー』

『アラマア何うも恐れ入ります。すす少しあさい』

『オットト溢れ出しますよ』ホホホホ.....  
『おてんさんは何か一つお譲ひなさいましな』  
『アレおでさんか、もう彼所で歌ひ出しまし  
た』

『サアおてんさんはけりや踊りなさい』

おてんさんはトウト浮かされて、手巾をひろげて  
しなやかに舞ひ始めた

『ハアお龜の初年頭.....』ヲヤ〜〜お多福共は  
餘程酔つて來た、それでなくとも平常キヤ〜笑  
つてゐるものが、醉つちや、堪りません「オッホッホー」  
「エッヘッヘー」「エヘヘヘー」「アッハッハー」と、か  
饅頭の様に頬邊を横にひろげ尻を下げ、腹を抱  
かへて轉ろげ倒れるもの、両手で両方の頬をふさ  
へ、落さない様にして笑ふもの、機ぐられて、も

一お腹の中から笑聲を出し切つて、ハアハアーと呻る

ものなどありまして、夫は／＼大騒ぎ、

『イイワ示一、笑ふ門には福来る』

『ヲヤマア洗ふ川には河豚來たる』

『悪い後には福來たる。其内に豆ふ多福が横鉢巻

きでズット兩肌をぬき、水杓子を振り廻はし、ド

ツコイ／＼と、躍り出た。短い足をチヨイ／＼と

踏張る風が、マア何とも言ふ様がない、まるで繪

にかいてあるポンチ畫！けれども御當人は一生懸

命、顔を眞赤にして「ヤレコリヤセッセノセー」。そ

ちでもこちらでも面白がり、頬邊たゝいて賞め囁ま

した、すると突然に戸外で一種變った聲「ヒヤ／＼」

と叫んだ、近に居たふ多福が、何者かと思ひ、窓

から窺いて見たら、生酔ひな達摩様であつた『ヤ

ア達摩さんが來た、面白い達摩さんだ』といふ聲

聞き、満座のふ多福共が一時に立ち上り、一ツか

らかつてやれと、吾も／＼と戸外に出ると達摩は

これはと思ひ、逃げ出さうとした所が、はやワア

／＼と取圍まれ、逃道が無い、仕方がないから目

をバチ／＼して居ると、だ多福共が二重三重に寄

集ひて見て居る。

『達摩さん面白い話がありますかね』

『有るとも／＼』

『何處へ行つたの』

『大黒さんの所へ、年始に行つたのだ』

『御馳走はあつたの』

『あつたとも／＼、海のものは鯛、鮪、板魚、

章魚、牡蠣、陸のものでは鴨、雉、牛、葱、芹、

蓮根！ お前さん達が行つたら、それこそ、頬邊落し

て歸るんだつたかも知れぬ。我輩は肴は充分だつ

たが酒が足りない、まだ五舛や六舛は飲める』

『では達磨さん此所に酒があるかと思つて來たんでせう』

『そーですわ〜』

『馬鹿いへ、年とつても達磨様だ、ソラ極りはい

ものだ、天下飲むべき時には五舛六舛は愚か、

一斗でも二斗でも飲むんだ。天下飲むべからざる

時には、チャント口をしめ、一年も二年も大人し

く力氣味んで居るのだ、お前さん等の宴會つて、

甘酒に汁粉、乍憚夫んな客なものなんざ一生飲

み、及び喰はんだ、唯餘り賑やかだから、チヨイ

と窺いて見たのだ。所がハヤれ話にならんじやな

いか、あれでは婦人社界の風紀を亂すといふもん

だ。いやはや呉れ果て、思はず囁出したのだ、少

とたしなむがい、』

こゝに端なくも鬭論會が開かれた、れ多福方の一

人薄口れしやさん腕まくりをしながら『勿論達磨さん、天下踊るべき時には、イセオンドでも何でも踊るべしだ。天下踊るべからざる時には、一年でも二年でも、チャント口をすばめて澄まして居るのですわ、而して、達磨さん、貴公さつき鯛や鮓の美味を誇りました、斯様な動物性食物をきこしめして、佛法の本旨に違はんのですか』善い哉言、れ多福諸嬢、此叔父さんを誰だと思ふ、此叔父ちゃんはの!! 日本唐天竺三子に至るまでも、もてはやさる、達磨大將様だ、そんな事は御心配に及ばんよ』

すると『エー此ん親父め!!』と唐突に達磨をれんのめした者があつた、達磨は不意討を喰つて、コロリと倒れた、がテクリと起上った、すると又横から『達磨大將寝ても起る!!』とれんのめした、又

テクリと起上つた、面白がつて、大勢のふ多福共

が、彼所からも此所からも『達磨大將ねても起る

!! 達磨大將ねても起る!!』とコロ／＼轉がし廻は

しました。何んば達磨でもかうなつちや、氣が氣

じやない、コロ／＼コロ／＼、もー熱くなつた、

目が眩む様になつた、到底も堪らんから、マ・ヨ

大暴れに暴れ散らしてやらんと、今度は自分から

コロ／＼と轉がり、ぶつかり次第にふ多福共をぶ

つたをしてやつた根が溫和いふ多福共ですから、

ア、怖い／＼と寝たり起きたり大騒ぎ、がら／＼

と室内へ逃込んだ。達磨も先きから意地目られ、

逃場を失つて、困り居るのであつたから、これは幸

ひと、クリ／＼と轉がりながら、自分の家へ還つ

てしまひました。

(まだあります)

## 音 樂 會

### そ の 子

#### (一) 美いちやんのふ家

東京の山の手、小石川の或町の裏長屋に今年十

二になる、美いちやんといふ女の子が、去年の暮

に、お父さんを亡して、今年の暮にはまた、お

母さんが病氣で寝んで居るといふ不仕合はせ、も

うお正月が三日か四日したら来るといつて他の子

供等は美しい衣物を買つてもらつたり、其上に羽

根だの瑟だのといつて、大騒ぎをして居るのに、

今日も美いちやんは朝から晩まで、お母さんの枕

元に座つて、始終お母さんの脊中を撫でゝは、

時々口の中で何か低い聲で唱つて居るのでありま

す、臺所には、御飯もありません、そして可愛相

に、美いちやんは、朝からまだ何も食べないので

すから、前からもうお腹が空いて堪りませんけれども、仕方がないから、低い聲で、唱歌を唱つて、氣をひきたて、居るのです。夫でも、時には、ひもじいことや、寂しいことなどを考へ出して、又病氣で眠つてゐるお母さんの顔をのぞいては、そと涙を拭いて居ます、それは、今のお母さんのお口に合ふものといつては、林檎より他にないので、どうか美しい大きな林檎をと思つてゐるのですが、今日の處では、夫を買ふお錢といつては一錢もないからであります。

寸の間休まうと思つて、窓を開けて、外を通る人を眺めて居ますと、蝦茶の袴をつけた二人の女學生の生徒が話しながら前を通つて行きます、美いちゃんは何の氣なしに、其話を聞くと、明日の午前、上野の音樂學校で、慈善音樂會があつて名高い、慈子嬢の獨唱があるといふ話し。

「ちよいと、あの先生所まで行けるといゝのだが」と、何かしらん美いちやんは、獨りで考へました。そして、少しの間、じつと、兩手を膝の上に置いて考へて居ましたが、やがて、何か思ひ付いたと見えて、兩方の眼が、新らしい希望の光で輝いてきました。そして、つひと立つて、二疊の間に来て、小さい鏡臺から櫛を取り出して、忙はしく髪をときつけて、夫から、小さい手箱の蓋を開けを作つて譜に合はせたのであります。

で、美いちやんは、大分勞れたもんですから、一

然し、此美いちやんは音樂が大好きで、又生れ付き不思議なほど音樂がよく出来ます。で、前から小聲で歌つて居ましたのは、いつか、自分で歌を作つて譜に合はせたのであります。

で、美いちやんは、大分勞れたもんですから、一

ましたが、やがて、すやく眠つてゐるお母さん  
の顔を、じーっと見つめて、そして、そーと、裏  
口から走つて出て行きました。

愛い、美しいやんが、女中に案内せられて、恐る  
く這入つて來ました。年よりはまことに大人び  
て居て丁寧にふ解儀をして申しますには、

(二) 悅子さんのお家  
こゝは、本郷駒込西片町の奇麗な家の二階の一  
室です。名高い音楽家の悦子嬢は、女中に向つて  
「もう、私、今晚は大變に疲れて居るのだがねー」  
一體私に會ひたいつてのは、誰だといふの」  
「あの、お嬢様、ほんとに、可愛い、小さな娘の  
子でございますの、そして、ほんのチットの間先  
生にお目にかかりたいつて申して居るのですよ」  
「そう、そんない、わ、よんでも来ておくれ、私、  
子供なら大好きだから」

「いや、つれて参ります」  
といつて、女中は下へ行きましたが、やがて、可  
愛い、美しいやんが、女中に案内せられて、恐る  
く這入つて來ました。年よりはまことに大人び  
て居て丁寧にふ解儀をして申しますには、  
「わの、夜分上りまして失禮とは存じましたが、  
おつ母さんが病氣ですし、夫に、お藥も、お米も  
頂くお錢がございませんもんですから……、少  
し先生にお願ひ申したいと思つて、明日の音楽會  
で、こんなつまらないんですが、先生に之を歌つ  
て頂いて、夫で、いくらでも、お錢を頂くことが  
出来たら、夫で、おつ母さんに、薬もお米も上げ  
ることが出来様かと思ひまして、夫で、參つたの  
ですが……」

といつて、小さな紙片を帶の間から出しますと、  
先生は、にこやかに  
「どれ、お見せ」といつて取つて見て、一寸口の

中でかるく歌つて見て、

「まあ、此譜は、汝れ作りになつたのですつて——夫に歌まで、まあ、どうして、こんなによく出来たのでせう？」

といつて、一寸考へて見て、

「あの、明日の音樂會へ汝入らつしやいな、え、来られますか。」

「はあ、参りますとも」といつて、美いちやんの顔は見てる中に喜んで輝き渡りました。

「けれども、病氣のおつ母さんを一人ほつちにして行く譯には參りませんから。」

「夫は、私の方から誰か女中を一人やつて、御介抱させる事にしますから、夫なら、來ても宜でしょ——、さ、こゝに、入場券が一枚あります、之を持て入らつしやると這入れますから、きつと私

の側へお出でなさいな、そして、之は、僅ですが、今晚れ歸りがけに、丸薬と他に何かれ甘いものでも買つて行つて丸上げなさいな」

美いちやんは、こんなに優しくせられて、それに、丸金までも頂いて夢でないか知らんと思つた位でした。夫で、越子さんに、御邊をして、途で、丸薬と夫から、大きな林檎を澤山買つて、大急ぎで、家へ歸つて、おつ母さんに、此お話をしました。聞いて居るおつ母さんは嬉しくつて涙をこぼしますと、お話をする美いちやんの睫毛にも、小さい涙の露がとまつて居ります。此晩、美いちやんは、なんだか胸がどきくして、大方眠らずに明かしました。

### (三) 音樂會

翌る日の朝。美いちやんは、早くから起きてそ

こいらを片付けて、すぐ上野の音楽学校へ出かけました。そして、奏楽堂へ這入りますと、まあ、其立派なこと。もう時間が來たのだと見えて、奏樂堂は人で一杯です。其中には、奇麗な帽子を被つて、胸や腕に立派な寶石の光つて居る衣服を着た西洋婦人も居れば、美しくお飾りをしたお嬢さん達も澤山居る、夫に真正面には、何某の宮様の御息所もお出になつて居る様子、美いちやんは、こんな立派の所へ來たのは生れて初めてだと思ひました。

そうこうしてゐる中に、會が始まつて、ピアノの獨奏だの、ヴィオリンの合奏だの、オルケストラだの、いろ／＼面白いのが出ます。音楽好きの美いちやんは、丸で天國にでも來た様に思つて、うつとりと聞き惚れて居ます。やがて、順序書きの通りに進んで行くと、さあ毎子さんが出て来ました。すらっとした美しい洋服姿、神々しい程奇麗なお顔、本郷のお家で、夜前お目にかゝつた時もまあ、奇麗な方と思つたが、こゝでお目にかかると、一層美しくお見えになると思つて、美いちやんは、側目もふらないで一生懸命に守つて居ります、夫にしても、私のこしらえた、あんなまらない唱歌を、この神様見たいな方が、まあ眞眞に歌つて下さるのでしようかと思つて美いちやんは息もつかないで待つて居ますと、毎子さんの後で、合奏が始まました、低い悲しい様な曲の合奏、美いちやんは、夫を知つて居ますから、一寸聞いたばかりで、「ハツ」と思つて、嬉しさに両手を叨きました。すると、毎子さんは彼の唱歌を歌ひ始めました。そして美しく澄み渡つた聲で、悲

しい様な、人の氣を沈ませる様な、この唱歌を歌ひ出したもんですから、聞いて居る人の眼には、皆一様に涙を浮めた位。そして又、其歌の詞といつたら、どうして、こんなに優しく可愛く出来たらうと思はれた位。

## (四) おしまひ

美いちやんは、丸で空を飛んで居る様な心地で家へ歸りました。もう、お錢所じやない。日本で一人といふ音樂家に、自分のこしらへた唱歌を歌つて貰つて、そして何千人といふ聽手が、夫を聞いて皆泣いたのですもの。

其夕方、美いちやんは、慈子さんが、尋ねて見えられたので、又吃驚しました。「まあ、こんなに汚い家へ」と思つてると、慈子さんは構はずすん／＼上つて来て、美いちやんの美しい前髪を撫で

ながら、病氣のふつ母さんに向つて、「始めまして、あの私は慈でござりますが、御嬢さんのお手柄で、大變なお金が、あなたの手に這入ることになりました、今朝の慈善音樂會で一千圓のお金が集まりましたが、其中、五百圓は、不仕合なあなた方母子さんに上げ様といふことになつたのと、夫から、美いちやんの唱歌を、或本屋で出版したいといつて、二百圓のお金を持つて來ました。夫で、さし急いで今晚上りました譯で、美いちやん、お金を皆こゝに置きますよ、そしておつ母さん、これで貴母のご病氣も、今によくなりましよう、これも、皆美いちやんのお孝行のれ蔭で、全く神様から下すつたのだと思ひます」。おつ母さんも美いちやんも、之を聞いて、もう嬉しいやら、有りがたいやらで、お禮もいふこと

が出来ないで、たゞ泣いて居りますと毎子さんも一所になつて泣いて居ります。

夫から、間もなくおつ母さんの病氣も直れば、毎子さんのお蔭で、大したお金が出来たので、美いちゃん母子は、楽しいお正月を迎へたといふふ話し（めでたし〜）

繪ときの答（前號）

(一)が電氣燈を下から見た所(二)が自轉車に乗つて行く所を後から見た所(三)が鐘を撞木の方から眞直に見た所(四)が水の中に小石を投げ入れた所(五)は車井戸を井の底から見た所だといふこと。

以上、皆あてた方は、神田の小倉とし子さんといふ方、お約束の通り、美しい繪はがきを十枚上げました。



## 婦人と子ども

三十



### 第五歳を迎ふ。

何かと申す中に、明治卅七年は過ぎ去つて、こゝに卅八年の新しい年を迎へました。讀者諸君にも、定めし恙なくこの新年を迎へられた事と遙に、御慶詞を申し上げます。

さて、顧みれば、本誌の始めて呱々の聲を上げて、此世に生れ出たのは、實に明治卅四年一月の今日でありました、生れ出づるや否や大方の同情を博し得て之が育養の任に當つた編輯人の力は、至つて微なりしにも係はらず、駿々として發達し、卷を重ねること四十八、遂に、第五歳に達して第五卷第一號を發行するに至つたのは、全く讀者諸君の同情の致す所だと、切に感謝する次第

であります。

あとより、本會は、尙未だ世間で聞く所の大きな會と申す程でもなく、従つて、本誌發行につきては財政上の困難も少くありませんから、本誌の体裁等に於ても、他の商業的新聞雜誌の様に、綺羅、錦繡の美を飾りて世と相見ゆるといふ譯にも行きませんで、此點は深く耻づる所であります。然し、淺學微力ながらも私共の盡瘁と諸君の熱心なる御同情とは、寧ろ此外觀の美など申す事を超絶して、終始一貫した着實な主義を以て、我が可憐なる幼兒の保育と、家庭の教育とに貢献した所の功績は、強ち大きくなではなからうと信じます。地方の讀者諸姉からも此點につきては時々、溢れる許りの同情を以て賛同せらるゝことがありまして、實に感謝の他はござりません。

今や、我國は、昨年からかけて、未曾有の大發展をなすべき時機に際會しましたことであります。本年の一月は、たゞ毎年の同じ様な形式的の目出度を申す許りではございません。日本帝國の大隆運を見るべき年の始として、眞底から、ふ祝い申すべく目出たいふ正月であります。我婦人と子どもも、幸に諸君の深き御同情に由つて、此好正月を迎へることが出来ましたのは、まことに喜ばしい次第でござります。我國が、世界的の大發展をするにつけても、ますく注意しなければならないのは、どうか、此大發展をたゞ、現在にのみ留めないで、現在の國民の此大功績は、永く、子孫後繼に由つて保持せられる許りでなく、更に、之を基礎として、益々發展させねばならぬので、ござりますから、是に於

て、子孫後繼たるべき幼兒の教養に向つては、ます々注意を拂はねばなりません。

本誌は、もとより微力ながらも、此點につきては、ます々現在及將來に向つて出来る丈け盡したいと考へますから、どうか、勿迄と變らない御同情を賜はつて、お互に、國家のため、幼兒保育のため働きたいと存じます。

年の始に當り、本誌第五歳に達したふ祝に兼ねて、一言本誌の抱負を述べた次第であります。(牧羊)

### 外國人の見たる日本幼兒の海軍思想養成につきて

本誌の卷首に附けた口繪は、畏くも我が、皇后陛下が去る明治三十五年十月二十九日、女子高等師範學校に行啓わらせられた時の、御下賜金を以て、幼稚園幼兒等のために、帝國軍艦朝日號の模型を購入しそれを幼兒等に説明して居る所でありまして、之は宮内省に献上する爲めに撮影したのであります、所で、これについて極めて趣味のある事があります。夫は、此寫眞が、何時の間にか佛蘭西に渡つたと見えて、佛國の雑誌に「日本の幼稚生の海軍思想養成」といふ題目で、まことに見事に複寫されて出たのであります。尚、全國のマタン新聞社の前に、同じく此寫眞が掲載せられて、彼國の一般人士の注意を引いたことは、目下巴利に在留せられる陸軍々樂長補永井健氏が讀賣新聞に出した左の記事で分ります。

近頃當地の新聞マタン社の前に掲げてゐます、多くの繪畫や寫眞は、詰り日露戰爭に關係したもので、其中に「海軍の出師準備とは如何なもので有る乎」と曰ふ問題で、何處で撮影たものか一枚の寫眞が有ります、夫れは我國の或る幼稚園の中庭に、一脚の机、其上に軍艦の模型が恭しく置かれて、周圍に七八歳の男女兒が多く、女教師の説明を聞いてゐる處で、外國の小兒と違ひ、殊に威敬する教師の前ですから、自から行儀の良い姿勢であります、併し艦体の種々な、緻密な個所を、種々な顔付で熟視する、所謂顏の造作を崩してゐる彼等の容子が、極めて無邪氣で、又此時、頗る珍らしい物を始めて見ると同時に、露西亞と云ふ大敵を、叔父さん達が往つて打ち破つたのかナーレと云ふやうな感じが持から、謂ふに曰はれぬ感に刺戟されましたので、前の話と結び付けたいと思ふのです。云々

私は、之につきても深く感じました。我が皇后陛下が、ひたすら教育の道を御奨励遊ばされて、小さな幼稚園の幼兒等までをも御顧みになられた結果が、即ち、今日此際、遠い海外へまでも、日本海軍の大成功の決して偶然でないといふことと感じさせることになりましたので、之も偏へに陸上の威徳致す所と恐縮感佩に堪えぬ所であります。

## 家庭とは何ぞや（答を募る）

家庭といふ言葉は、近頃になつて著しく人の注意する所となりました。そして此家庭といふ言葉は極近頃になつて出來たので、多分英語のホームといふ語に相當するのでせう……で、家庭とは何ぞや

といふ問と設けて、家庭の意味を極簡明に表出するのは、極めて面白い許りでなく、又所謂家庭生活を營んで行くに頗る必要なと、考へますから、こゝに廣く、之についての答を募ります。左記の條件御承知の上で、何卒、續々御贈附を願ひます

一、用紙は端書、文句は成るべく簡短なるを要す

一、氏名は匿名にても宜し。

一、期日は来る二月十五日まで、

一、答案の優等と認められた方三名までに粗品を呈す。

一、答案は左記の處宛て御發送のこと

東京下谷區竹町一番地 東基吉

尚、参考のため、次に、外國に見えたる、面白き文句の一例を掲出ししましよう。

Home: A world of strife shut out, a world of love shut in.

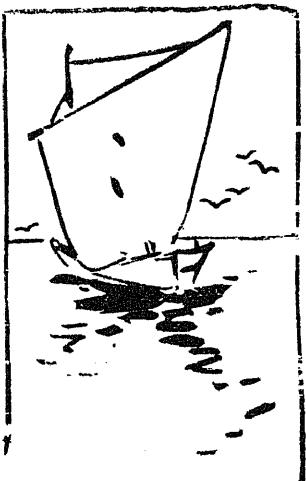
母國の、<sup>おもて</sup>おうち、愛のしゆ入れられたる場所。

Home: The father's kingdom, the mother's world, and the children's paradise.

父の王國、母の世界、而して子供の天国。

Home: The place where the small are great, and the great are small.

小なる者は大となり、大なる者は小となる所。



## 小兒の病氣に就て

醫學博士 三輪 信太郎君

私は子供醫者でありまして、其上に天性子供が好きでござります夫故少し不愉快な事をでもあれば病室へ往つて病人を見れば癒る、それでなければ子供の樂しく遊んで居る處へ行けば氣分が晴れぐするといふ程子供好でございまして、自分も許し、人にも其點で許されて居ります。其私が今日は幼稚園のことにつ事なるゝ方々と茲に會しませたから、私は非常に愉快に思ひます、皆様も定めし私と同様に子供が非常に好なことであらうと信じますから、此子供好の輩が澤山集りますは、子供の爲には幸福でござります、そればかりでなく私は十數年間相見ざりしところの舊友に、本會に參つた爲に會合するやうなことも出来て、其舊

友は矢張子供のことに就て文筆を執つて居る者で私は取つては今日のやうに愉快なる日はございませんで、そこで私は今日此場へ出は出ましたが何を話して宜いか自分には分りませぬ、只嬉しいといふ念に充たされて居るばかりでござります、子供の智識を啓發する方の側に就ては、皆様の方が十分御經驗あらせられることであります、私は夫等の點に就てはとんと知らぬ人間で、只子供の病氣を癒したり、又は子供が病氣に罹らぬやうにといふ方を始終心配して居る者であります、夫故に貴嬢方の御承知の子供の智育の點に就ては私は一向申上げるだけ智識を有つて居りませぬ、それで私は自分の職掌の醫者といふ側で子供に關係することを申上げて皆様の御参考に供したいと存じます。

子供の何者たるやを解釋致しますると、「大人は子供に對する者にて子供は大人よりは身體が小さいもの」それでは満足出來ませぬ、尙ほ説明しますれば、「大人はもう成長し終つて居るが子供はこれから成長せんとする者である」故に大人は自分が成長し終つた身體を保存して行けばそれで宜しいのでございますが、子供の方ではこれより成長して行かうといふ者故、只保存する丈では済みませぬのでございます、從來成長し來つたところのものを保存すると同時に、これより漸々成長して行くといふことがあります、私は自分の田へ水を引くのではありませぬが、生理上から申上げますると、子供は大人より二倍の問題を此際に有つて居ります、もう一度繰返しますれば大人は成長し終つたもの故、只其身體を保存して行けば宜しい

が子供の方はこれまで成長し來つた分を保存するのみならず、それと同時にこれから育つて行かうといふ方へ力を用ゐなければならぬ、それ故大人が子供の方が大人よりは活動するものでございます、又子供は大人よりも二重の問題を有して居りますが、併し大人の様に自分の分別などといふことは勿論ありませぬ故に、少し重い病氣に罹つたときでも、それにとんと構はんで丈夫なときと同じようにやつて居る様な姿ですが、大人の方はそれ反対して、少し熱でもあれは直に家に引込んで寝て居る、夫故に小供は大人程分別はないが重い二重の問題を有つて居る、成長し終つた大人はもう長育しなくなるばかりでなく樹木が段々古くなりすれば自然に枯るゝ如くに朽ちて了う、それは何程蒙い人でも詮方がない、それで子供が跡の

代表者となるのでござりますから、子供といふものは國家の爲に非常に大切なものである、此子供が自分の家にある時分には其両親たる者は自分が極く近い義務として此子供の爲に心配しなければならぬのでござります、併ながら両親たる者が自分で始終子供を育上げるといふ譯には行かず、智識或は其他の點に於て幼稚園などへ入れる、今幼稚園などでは三歳から六歳までの子供を取らるゝ事でござります、御承知の通り子供は産れたり中から營養に不適當の事があつて、此營養といふことに就て一寸お話を間に介みますれば、お母さんの乳で育てますのが天然營養であつて、それからお母さんの乳が出ないとか、或はお母さんがしゃべりきれないとか、こうなるとお母さんがあなたの交際の爲に自分の子供に乳を呑すこと

遙に弱うござります、勿論これは十分御注意になつて居ることでございませうから、私が尙此處で申上げるのは失禮な次第ではございますが、幼稚園では只單に智識の方を啓發したばかりでは、ふ預りになつた方が十分に其義務を盡しなすつたと贅辭を呈するにはまだ早いだらうと思ひます、幼稚園に従事なさる方々が十分に其義務を盡された、見事に自分の立場をふ固めなされたとお賞め申すことの出来るのは、どこまでも智識其他總てのことに御注意あつて、其上にお預りの子供が健康にか育ちになつたならば、勿論十分御注意あつても其子供の體質が弱くてはそれは仕方がありませぬが、併ながら子供は保管者の不注意の爲に不時に病氣を惹起することがありますから、子供の健康上のことも十分に御注意遊ばしてこそ初め

て其方にお賞め言葉を差上ぐることが出来ると思ひます、併ながら此幼稚園に従事なさる、方々は医者でないから健康のこととに御注意なさると言つてもさう別段深いことで醫者に望む如きことを望むといふのは無理であらうと思ひますが、普通一般の人の目に着くやうな事柄を見落しなさらぬ様になさつたならば、隨分子供さんの爲には幸福なること、存じます、子供さんばかりでなく其兩親の爲にも亦其一家の爲にも、廣く言へば國の爲にも大なる功績になるだらうと存じます。

今私は是より御注意なすつて置かれたき、平易にして行はる、ことを申上げます、子供のことを能く若き樹木に譬へます、子供と云ふ若木には二つの大青虫がつきます、それは咳嗽と下痢とでございます、先づ咳嗽に就て申上ぐれば、大人では風

を引いて咳嗽あるを棄て置くとも多くは療ゆるもの  
子供さんはさうはいかぬ、直ぐそれが他の病になります。勿論三歳以上の子供になると左程のことはありませぬけれども、併ながら大人程の抵抗力がありませぬ、故に少し油斷すると遂には肺炎など、いふ様な重い病氣にもなります、肋膜炎など、いふ病氣も矢張咳嗽がそれを表示しますから咳嗽は非常に御注意なさらなければなりません。此頃東京に百日咳が流行して本郷區邊などには随分多いやうに思ひます、私が昨日或病家へ參りました、兄さんが以前から百日咳に罹つて居たのに拘はらず、一緒に妹を置いたら遂に感染したのでござりますので、其兄さんは何處から感染したのであらうといふ話から段々聞いて見ますと、兄さんは毎日或る幼稚園へ通つて居たんださうです、

には全く病氣でないときと同じで、元氣が非常に宜くて飛び走つて居る、今一寸申上げたのは百日咳の極く、模範になる咳嗽の模様でござります、此百日咳といふものは今日までの研究の結果にては病毒が未だ分りませぬ、一人の子供がこれに罹つて居ると他の子供に傳染して行くものあります、すが、無害なるものであれば如何程傳染しても心配はありませぬが、百日咳の後には甚しく人の恐怖する結核病を惹起すること往々あります、前陳の次第故に幼稚園従事の方々は、其ふ預りの子供さんの中に咳嗽をする子供があるときは、其ことを兩親に注意をしてやるといふ位の手數は是非なさらんければならぬと思ふ。一人の子供が百日咳に罹りつゝあるのを知らずに、其子供さんを他の子供さんと一緒にして置くと大勢に感染します

例へば此處に三十人のお子さんの居る幼稚園があるとすれば、其中の一人が百日咳に罹つて居ればそれが皆それぐに感染又感染すると非常なものになります、夫故に咳嗽は子供の爲には若樹に生ずる一つの大好きな青虫のやうなものであると言はなければなりません。

それから今一つの大青虫は下痢であります、此下痢に就ても亦此處で一言申上げて置きたいのは、此頃東京で赤痢が流行しつゝあります赤痢の類似症(赤痢)と診断したものでなく赤痢と紛らはしい様な便を漏らした者でも見たならば、早速届け出よといふことでござります、此赤痢の徵候に就て少し申上げますれば、便が通常の飴のやうなねばくして粘液に血が混つて赤くなりて居る、併ながら子供に就ては必ずしも血が混つて居るとは

言へませぬ、飴の様なものばかりのこともありま  
す、さうして子供が廁に往つても十分出来ませぬ  
で、跡からくと度々子供が通ふやうな状でござ  
います、幼稚園へ来て居らるゝ子供の中で便所へ  
度々通ふ方がありましたら、それを赤痢か何だか  
といふことを貴嬢方に御診断を請ふといふのは勿  
論ちつと無理な注文でござりますが、此子供はふ  
腹が大變悪いからといふことを両親の許へ注意を  
なすことは必要であると思ひます、赤痢でなくと  
も他の病氣で腹が下るのであつても、兎に角子供  
に取つては危険でござりますから、廁へ度々通ふ  
ことがあれば御注意あつて然るべきこと、思ひま  
す、近頃は學校醫も置かるゝになりました、進  
んで幼稚園にても矢張醫者を置いて、殊に其醫者  
は小兒科に堪能であるものを置かなければならぬ

ことは今私がお話申しましたことなどに依て分る  
ことであります、併し今日はそれ程のとまではな  
か／＼手が届かない場合でござりますから、少く  
とも幼稚園をお預りになつて子供の世話をなさる  
方々は、今日申しました咳嗽とか下痢とかいふこ  
とにには十分御注意下さるとは必要であらうと思ひ  
ます、此御注意は大變に子供さんの爲になり、子  
供さんの爲になることは國家の爲になること、考  
へます、終に尙一つ申上げて置きたいことは子供  
さんの顔色が悪く首の周圍にグリ／＼の多いもの  
は瘧癪質でござりますから、さういふ子供さんは  
は頭を使ふやうなとを無闇に教へ込まないやうに  
御注意ありたしつひ自分の職掌としてやつて居る  
ものでござりますから、失禮を顧みず色々なふ  
話を申上げましたことは偏にお許を願ひたうござ

します、御同様子供の事につき心血を灌ぐ者は、  
些細の事にも注意せられんとを、此些細の事に留  
心すると否とは繋る所大なると申述べん爲め、  
醫師として心付く點一二を擧げて諸嬢の清聴を汚  
せる而已

(此一篇は掌て、本會に於ける同博士の演説筆記なり)

### 貞一の日記

(拔萃) (明治卅六年五月)

#### その母

明治卅七年十月卅日 父母とばあやに伴はれ 芝浦の海水浴に行く近頃になき 海を見晴したる二階にて、遊ぶ、盆の上の茶碗を三つ五つ重ねてはくづし、将葉の駒を拾ひ

ては入れ身体こそ動さね 手はいろいろに動  
きて 面白さうなり 曇りたる空の 時々雲破  
れ 日の光さして 室の中明くなれば アツキ  
／＼と大聲にて指さす、風寒し、夕になりて  
電車にのりて歸宅す

便通 なし

睡眠 まぶたを閉じて寝る

食事 全前

十一月三日 母に手を曳かれ 門の前より 金刀

比羅神社の方へ一町ばかり歩む

十一月四日 母と國手小原先生に、行きしに 病氣もはや宜しければ 診察も今日にて よろしとの事に、大喜びにて歸る。

便通 三回

十一月五日 元氣大に宣し マツチの火を見て



便通なし

十二月十九日 昨日は無事にミルクを飲みたれば 今日は今少し量を増して試みんと二ヒの

ミルクを昨日と全じ割合に

薄めて與へしに

飲む時は喜びて飲みしも 半分程経て皆吐き出

便通三回

十一月廿日 誰にても少しく聲出して笑へば 其の聲の大きくとも極めて小さくとも必らず泣き出す何か自分の事を云ひて笑はるゝと思ふ様子なり 病氣のため痘の高まりしならん。

便通二回 普通

十一月廿一日 父の膝に乗り 押して頂戴といへば両手にて父の胸を押し 父仰向に轉げて

起して頂戴といへば指をつかみて引張る頭にて押し合ひといつて父頭を出せば自分も頭をつき出し左右に動かしながら押す。

便通二回 柔し

十一月廿三日 ばあくといふ 意味なしの發音にはあらず 全くばあやをさして云ふなり。

十一月廿四日 様側へ獨にて歩き出して來たり

庭に立てる母に下にれるせとせがむ様子なれば沓をはかせ 金刀比羅神社まで手をひきて歩かせしに大喜びなり 社の階段四つ五つあるを昇る 下るのはあやふき故下してやればまた昇る 近頃始めての元氣なり 五度ばかり全じ事して遊び 其次ぎは銀杏の葉の黄色になりて落ちたるを拾ひては 夕方になりて室内を歩き 聲を上げて笑ふ 病

氣の爲何事も皆二月程前へ後戻りせり。

十一月廿七日 今日神田の小原先生に行き もはや藥をやめて宜しからんと云ひ渡されたり

十二月二日 或る人貞一と全じ年位の 小兒を連れて來訪せられしに 貞一よろこびて 手を

出してはからかふ 夕刻母に抱かれて 檻側に出しに 軒端に何とか云ふ實の 赤くなれるを

見て ウーーと指さしては それと云ふ 折りて枝の儘 渡したるに 一々其の小さき實を

もぎとりては 母に渡す 母障子の棧の上にこれを併べしに 自分も眞似しては いくつも便通

たれば一晝夜に五回とす 每日大抵六時より 七時の間に睡り九時か十時に覺むれど 又抱きて睡らすれば 十二時或は一時頃まで睡り 其時食事をさせれば 朝六時過ぎまで眠る 朝は七時に食事 それより 四時間づゝ間を置きて 食べさせる 十一時 四時 七時といふ様に毎日眠りの時間に依て 遅速はあれど 大抵これぐらゐで 他の食物は 決して與へず 醫師の定められし 分量の外は決して 多くは與へず からしめ等一切なし。

病氣のため體量の減じたる割合左の如し

九月廿七日 ..... 九〇七〇、〇

十月十七日 ..... 八三二〇、〇

十一月一日 ..... 七七五〇、〇

十一月廿七日 ..... 八六九〇、〇

食事 一回の分量は從前に全じけれど つゝけてよくねむり 夜は食べずともすむ様になり

／ ならべる  
便通 四回

## 家庭に於ける所感（承前）

長野 飯塚忠次郎

## (十) 小兒と學齡

小兒が學齡に達する様になる、即ち學校に行く年頃になると、其準備としてなにやかやといろいろと氣をくばらねばならぬ、先づ第一に學校道具そのものであろう、即ち石盤だとか、書籍だとか専ら學校に於いて使用する種々様々な物品を買ひ求めてやらなければなりませんから、親たる人は後で小兒のさしつかへの起らぬよう萬事注意深くやつてほしいので御座います、それで受持となるべき教師を訪問し、或は學校に行つて問合せて、教師となる人のさしづに依つて必要な道具を買ひあたへてやらねばなりません、小兒のいひなりほうだいに買ひ求めてやらぬ様になさいまし。此

の地球上にふぎやあといつて母親のたいないから生れ出でてから、親の惠に依つて樂しく數多の歳月を平穏無事にけいくわしてこゝにはぢめて一つの樂園ともいふべき學校に入ることであるから、小兒のよろこびは勿論親の日頃のたんせいも之によつてみるとことができて、親たるふ人の御胸中はさもどんなで御座いましようか、私達のとうていそうぞうのできない程でありますよう、人生に於いて種々快樂は御座いますけれど實にこれにこした愉快はありますまい。スマイルスが、かように申された事が御座いましう「德育を施すべき初の場所は家庭、其次是學校、終は社會であつて、吾人は必ず此の三大學校の経過せざるべからず」と、實に家庭の必要な場所なることは今更ことあたらしく申迄もない、今や學校に入らんとする小兒

は丁度此の三一大學校の第二門に入らんとせるものでありますから、何事も古人の申されたとより始めがいちばんだいちで御座いますばへ、何卒此の好機をとりはづさずに充分教訓の任をつくされたいのです。

抑て之等の學校道具は最も丁寧に大切に取扱はせることの習慣をつけて、學校でつこふしなものは何の區別なく自己の智を啓き進める道具で御座いますから、いひかへれば寶であるのです、これわるがために學問をして智徳を増進することができるといふことを、平素からよく話して置いて實行させねばなりません、それから他方面には儉約の風をも教へる、たとへて申そなならば紙がいくらあつたからとてむやみにあたへぬように、むだづかいをさせぬ様に、紙ばかしにかぎつた事は御座

いませんとのようなつまらぬものでも皆な幾分づゝの人の手數をへてをります、つくつた人のほねをりがこもつてゐるものであるから大目にせねばならぬことを一家の人々がさきにたつてやつてみて、よいお手本を示さなければいけません、いくら口先きで小兒に教へたつてダメです、やつてみせるのがだいいちです、みなさんも本紙の第四卷第六號でいそつぶ物語にあつた親子の蟹といふのをおよみになつたでしよう、まことにあの通りです、小兒を教導するには自分からして動かねばなりません、またはたらかねばいけませぬ、口先でばかしやかましく教へたとと、をこないによつて教へたことがらとは、小兒發育上に大なるさいが生じて行きます、之れ最も小兒を教導する其人のちつこうすべき點で御座います、わるいたね

をまいとしてよきしいうかくを得たいといふことは  
たいへんなまちがひで、何事によらずよいことを  
やれば従つて良果があらはれてまるります、こう  
いふぐわいで御座いますから學校へ小兒が行くよ  
うになつたなら大に教導のためひたすらつくされ  
たいのです。

まゝ世間できいた事で御座いますが今は一寸小兒  
を學校へやればといつてもなかなかへんで、  
色々な學校道具をかひもとめてやらねばならぬ、  
そればかしか太郎のならつた書物を二郎、三郎に  
ゆすらうと思ふと教科書の改正とくる、子供の多  
いうちみたいなところではとても、こんなに幾種  
も買ひ求めることは出來ぬと、こんなことをいふ  
てるるお方があるそうです、表面的からよく觀察  
したなら種々な家庭の事情から思はずしらずこん

なぐちがでるかもしけぬが、學校に小兒をやるのは  
何のためですか、學校は將來我國をけいえいす  
る、小國民をようせいする神聖なる場所ではあり  
ませんか、あすこの兒も學校に行くから世間のま  
へもあるしそれに學斷にも達してゐるからやろう  
ぐらいい考へで學校にやる人があつたとしたなら  
ごくきけんなものと存じられます、其様なお方の  
小兒をあづかつてゐる先生は甚だめいわく、そん  
な單純なる考へをもつてゐられる家庭であつては  
とうてい完全なる教育をその小兒にはどこすとい  
ふことはできぬ、學校の主意と家庭の教育とあい  
まつてこそはじめてよいけつかが得られる、學校  
であるくら教師が火の様になつて熱心に教へてやつ  
ても、家庭でみづのようにつめたくてはだめであ  
る、教育の主義、學校の今日世に存在する眞意を

よきさとられたい、教育の價值はどこにあるやといふこともよくしつてほしく、年はうつって、國はありてためしなき新年は來ました、軍國多事のさ

い一層斯道のためにつくされ以て完全なる國民をつくられたるので、それには少年時代が最もゆるかせにすべからざるときで御座いますから、進んで小兒教育のためうでをふるつていただきたいの

であります

## 若菜籠

其

子

▲我が古郷に狂句などに長じたる男ありけり。年の始の朝の宮参りの道に、友なる神官に出遭ひて「先づ御慶、去年のはらひは如何にぞや」と問ひしに、神官即座に袖かき合はせて、

よらへどもるかり衣の雪」と答へたりしこそ、可笑しかりしか

▲これも、全じ所にての話なり。さる婦人、夢に珊瑚の玉の二つに割れたりとみて、詮なき夢を見たるものかなと、兎角に思ひ煩へるを聞きて、あ

る人

さんごじゆご、二つにわれば七つ半

七福神より半分上なり

と咏みて與へければ、此上なく喜びて、心を安んじたりといふ。

▲我が妻をよぶに愚妻といふ。之を英語に譯して my foolish wifeといはゞ、如何ばかり、可笑しからん、我が子をよびて愚息、豚兒などいふも同様なるべし。

▲妻持てる男の、或日訪ひ來りて、こま／＼しき

まで女の缺點を指し示し給ひて、得たり顔なりければ、そは奥様につきての御経験談とこそ承はれ、他人につきてはとてもざる細き御觀察をせられ給ふ機會在すまじければと答へしに、其人苦笑して、其後は何も仰せられずなりぬと、我友の語られしこそ、可笑しかりしか。  
 男の馬鹿ならぬ限りは、女は涙を以てにあらざれば命令する能はず。『Woman can not command man, unless he is fool, but with tears』涙なき婦人は、所詮男を服すこと能はずの意か、さるにても、頑固なるは男の心にもあるかな。

▲浅ましきもの、フロツクコートいかめしく裝へる紳士の、いたく酔ひしれたるにやあらん、片手に折り詰をぶら下げ、片手に楊子などくわへたるまゝ、足許も危けに歩み出でたる、女の聲高らかなるに。

に取り亂して物などうち争ふ氣はひの聞ゆる、蝦茶袴はきたる少き女の汽車などにて、若き男と笑ひ戯る、を見たる、さる運動會に行きし折、樂隊の進行曲の中に、俗曲春雨のうち交りて奏せらるゝを聞きたる、さては我が夫などと過ぎにし年學びの窓と共にしたりける學友の、見る蔭もなく落魄して、聊かの恵に預らんなど言ひて訪ひ來りしこそ、いみしう、淺ましくも感ぜられしか。  
 ▲一年、白粉のこと、かしましく諭らはれしこありしが、相當に容儀をつくらふことも亦女の一の嗜とこそ教へられたれ。さりながら夫持る人の、外に出る時ばかり、外見を飾りて、家にてはひたすら、取り亂し居るは、本末顛倒とやいはん。女は己を愛する者の爲めにかたちつくるとぞいへる

▲め、かし過るはもとより宜しからず、れりとてし  
みつたれたるも賞むべきにはあらず。男と女とを問

はず、相當に容儀をつくらふは、禮義として必要  
なり、教育の任に當れるものに在りては尙さら。

▲家庭教育と申すこと、近來いみしく八釜しくな

り侍り、但し、そが原理や方法につきてのみ云爲  
する丈では實蹟の舉らん由もなし。要は、父母の

模範に在り、一見は百聞にまさる、母蟹、其子に  
眞直に歩まんことを口を酸くして教へしに、一度、

其子に、さらば、先づ、おつか母さんから歩いて見せ  
て頂戴な！といはれて遂に之に應ずること能はさ

りしといふ故事をへ侍り。

▲賢母一人教師百人に勝るとは、西洋に名高き教  
育者の言葉なり。さらば、女教師となりて百人前  
の力を盡さんよりは、賢母として一人前の務めを

なれんかな。

▲近頃の學者の、妻を選むに徒らに年の少きと面  
の美なるを以てするは誤りたらずやと、さる教育  
ある婦人は申されき、げにく、高き教育を受け

たる處女の、高位高官をのみ婚嫁の目的とするに  
劣らぬ非事なりとやうは。

▲高慢なる人は、心になる程と思ふ説を聞きても、  
態と鼻であしらふ態度を取るものなり。

▲名譽の語は美なり、而も職責といふ語は一層美  
なり。“Glory is a good word but Duty is a bet-  
ter one”へは台衆國現大統領の名言として傳へら  
る。

▲よき程に年とりたる人の、年頃なる我子に妻を  
求めさせんとせるが在せり。一日、新に妻取れる  
人に向ひて、「兎角老人なき家にては、嫁の氣儘に

なり易ければ、老人も、一家には必要の道具に侍

り」と申されけるに、其人、「げに左よりこそ候はめ、

宅にては老人在ざぬ故、妻は存せらるゝ如く氣儘に候」と答へけるに老人、狼狽て、「いや、貴所

のは、例外に候ものを」と申されけり。人を見て物は言ふべきにこそ。

▲或人前つ頃、外國留學より歸朝せし人の許を音  
つれしに、不圖、玄關の正面に、面會日何曜日と  
筆太に記されたるを見て、さては今日は面會は許  
されぬにこそと、そことに歸りて、知人に其由を語りしに「まこと彼の人こそ新らしき國の知識を得て、故き國の常識を忘れたりける」と語られたりと、

喜劇

石井泰次郎

春の菓子として、古きを賞味する爲に捨へる山椒餅のつくり方

原 料  
砂糖 又ハ三盃  
山椒粉 上新粉  
水

百勿

上新粉を、皿の大きなるに入れて、水を少しづ  
ゝ加へて、手にてでつちて、次第によく水を合  
せて、漸くかたまりになる程にこねて、一かた  
まりとして、團子一粒ほどの量にちぎりて、蒸  
籠の内に入れ(蒸籠は簣の上に布巾を敷て、其  
上に、ちぎりたるを並べ入るゝなり)、布巾を以  
て蒸籠の上よりおほひて、又其上に木蓋をして

炭火にかけたる湯鍋の上にかけて、むすこと、二十五分より三十分間して、一つ取出して、中までむれたるを見て、ふろして、雑の厚き鉢に入れて、擂木にて搗きて、よくつきて、次に手にてこねる、此時砂糖（砂糖は前方に金筛にて裏でしに漉てかたまりなきやうにつくり置くべし）と少しづゝ、木杓子にて入れて、だん／＼とこね合せ、大方こねて砂糖まはりたりと思ふころ、多くの砂糖を一度に入れて、能く能くこねて、此時に山椒粉をもいるなり、次に板の上に、取粉を敷たる上にと出して、とり粉は同じ粉にてよし、手につかぬ爲につかぶ物なり、麵棒を以て（取出す時に、つきたるを一かたまり、扁圓餅の如く丸く、平くなして、取出すべし）取粉を、上にもよくつけ、棒にもつけて、

のばすべし、取直し取直して、四方へと丸く薄くのばすべし三分の厚さになれりと思ふまでのばしてよし、

これにて山椒餅の捲方はすみたれど、肝要の山椒の入かたをいはず、次にいふべし、

山椒は、干山椒をもとめて、ちゆくと黒きを取去りて、皮をはうろくにて、黒くこげぬほどに炒りて、薬研にて、極めてこまかにすりふろして、目の極こまかき網じやくしにて、ふるひてつくりたる粉を、六つまみほどを、右のれん木にてつく時に入れて、つきあはせ、後に手にてでつちるなり、

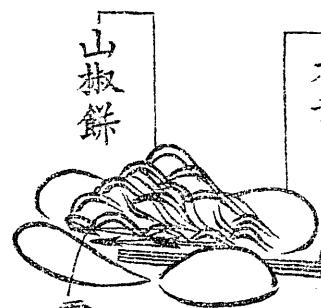
これを三分位の細さに庖丁刀にて切りたるを、山椒切といふ、又切山椒ともいへり、さて盛方は切たるまゝ崩へず、一本づゝばらくに分ちて、

山形にもりあぐるなり。

右は 御題新年の山によせたる趣向なり、

梅形の盆

青キ細竹箸



山椒餅

雲餅製又ハ羊羹製

松葉の菓子

盛合ス

山椒餅を紅にてそめて盛合はすときは、つく  
ときによくつきで、一かまりによせて、紅を  
とかしたるを入れて、手にてこねて合するな

色取には、紅のと合せたるがよし、

梅形盆なければ、梅模様ある器を代用しても

よし、

竹の箸は、細き青竹にて、葉のつきたるまゝ  
にてもよし、

松葉のくわし、あり合の品をそへて出すべ

し

雲餅製にする時は、砂糖百匁、みちん粉三十匁  
かたくり粉二十匁のわりにて、熱湯にてこねて  
つくる、松の色は、改良青粉といふ物にてつけ  
てねりてのばしてつくるなり。

◎まん洲の新年といふやうな菓子

原料 上新粉

砂糖三匁又四ホン 六十五匁

薯蕷太キモノ

晒餡北海道製

六寸

五十匁

七十匁

一合五勺余

水

砂糖

砂糖を金網にてとほして（木杓子にて押て裏よりの方へと漉すなり）上新粉をませて、薯蕷をふろし金にて（水にて洗ひて、皮をむきて）

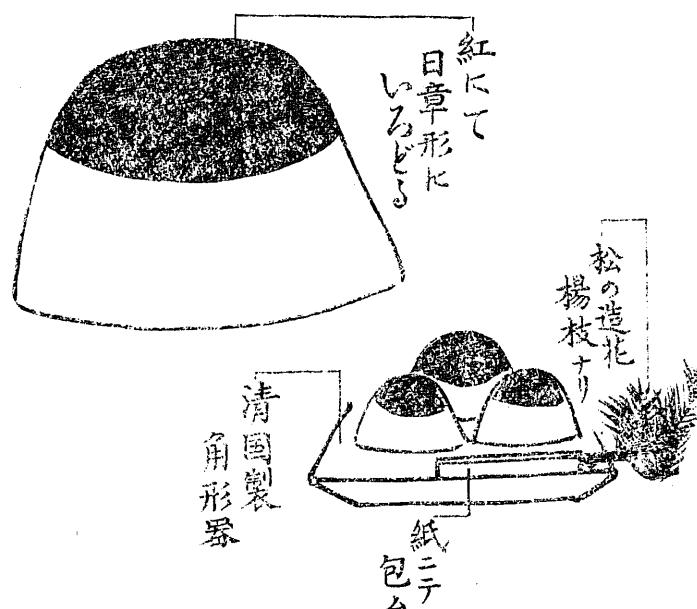
すりふろして、粉に合せて、ねりて、粉を一つ  
一つに、丸くとりあげて、餡をつゝみて蒸籠に入れてむすべし

○餡の搾方は、鍋に砂糖を入れて、水を加へ

て炭火にかけて、煮とかして、其上へさらし干あんを少しづゝ入れて、木杓子にてこねて、

ねりあぐべし

○さて包みたる上にて、蒸籠に入るゝ時、簣の



上に布巾ふきんをしきて、其上そのうへにならべて、又上またうへに

も蒸籠せいらうのふちに布巾ふきんをたはひて、木蓋きふたをして

むすべし、時間じかんは十分ふぶん間にてよし、

○包む時とき、出来るだけ薄くつゝむをよしとす

つねの饅頭まんじゅうの製せいの一いつ種しゆにして略製りやくせいそばまんぢ

うといふ物ものの拵そなへ方かたなり、其皮そのはへ紅彩色こうさいいろにて

日の丸まるをゑがきて用もちふ、これも新年しんねんの山やまの意い

なるべし

あらたまの年の光ひかりもさしそひて  
あさ日ひにきよしつるの毛衣けごろ  
新年鶴しんねんづる

新年鶴しんねんづる

世のひとの心こころは春はるになりぬとや

年としたつ庭にわにうぐひすのなく

早春梅はるしゆうめ

春はるもまたしらずやあらん我宿わがやど

わたくしものゝうめの初花はつはな

新年山三首さんねんやまさんしゅ

東基吉

年としたちて御代みよをことほぐ例たとひには

まづ仰あおがるゝ高千穂たかちほのやま

新年天しんねんてん

いかのほり高くのほりて大空おほぞらも

兵ひょうの血ちしほそゝぎしあときえて

新あたらしき御代みよの光ひかりのてりそひて

のとけき春はるの満洲まんしゆの山やま

のとかに見ゆる二龍山はも  
昨日までしこくさ生ひし山の端ゆ

けさうつくしく上る朝日子

### 夜の思

林壽祐

\* \* \* \* \*

喧しづかなる夜牛の色  
星も眠るか聲はなし

下界の響もをさまりて

月に鳴き行く雁の聲

仰げば高し天津そら

思へば尊うとし神の業

縦合や此身は低くとも

魂は清けき汝が姿

ミユーズの神の御前に

吾を導け月よ星』

蒼天高く且つ廣し  
夕雲たゞよみ西の空  
日は入り果てゝ影くらし。

宵の明星さきがけて  
星は黄金を布けるごと。

月はやがてひんがしの

海の面より冴え上り

榮華の庭も賤が屋も

あまぬく照らす神の業』

### フレーベル會俳句端書集

一、課題 春季雜吟一人十句以下

一、締切 一月二十五日限り

一、披露 明治卅八年三月發行本誌

一、賞品 天地人三座には美景を呈す

一、撰者 當分本會の撰とす

本誌講讀者は何人にとっても投吟する事を  
得用紙は繪葉書（眞筆刷物隨意）に限  
る、住所氏名雅號を明記し必らず左の  
名宛にて送らるべし。

埼玉縣入間郡芳野村

フレーベル會俳句掛

鹽野奇零宛

第六回俳句端書集

万歳や鼓の音の幾間越し 長野飯塚 晓霞

争ひも來て笑ひぬ歌がるた

陣中に餅も配りて今朝の春

正月や遊び暮して日の足りぬ

陸奥花松 晓星

同

海戰の跡も靜かに初日の出 同  
元朝や見心廣き海と山 平岩學洋  
何事もせずに忙がし三ヶ日 同  
羽絨着た人も積込む初荷かな 同  
初空や尾上の松に鶴の聲 埼玉帶白園一甫  
魁の花なり香なり福壽草 同  
軍國の咄しを先や禮者人 同  
二三輪書齋の窓に梅の花 岩崎一樂  
旅にして初日迎ひぬ蟻が家 黒田一葉  
渡船場につなぎし船や松飾 同  
夜は松の上から明けて初鳥 大分阿部きく  
初東風や出舟の競ふ港口 神田松本のり  
この儘に置ても見な門飾り 堀原田紫水  
着ぶくれて元日より小百姓 福岡遠藤眞月  
拍手の音いさぎよし初日出 大阪松風庵

雪ながら富士は春立つ姿哉	埼玉 淑齋 隆明	年々に株の殖えけり福壽草	内藤 清堂
目に古き物とてなし今朝の春	同	屠蘇くわ人に聞かれてよい話	同
叱られた門を御慶の始めかな	同	來合せに聞き人になりぬ謠初	神奈川 俳狂生
影膳に屠蘇を捧げ今朝の春	東京 久米 辰子	門松の曙作る街かな	同
片耳は去年のまゝなり初鳥	同	片言に出来て嬉しき御慶かな	同
斧知らぬ敵傍の山や初日出	同	万歳の一人目立つや夕わたらし	同
日の丸の亦勝利やからめ風	同	暮かゝる空に賑はし羽子の音	川越 根岸 廣吉
遊ぶ日を子ね問はれけり初暦	同	引すぎて尻餅つくや小松引	川越 田村 十一
御降や相手のはしき小酒盛	同	天、三郎も泣かで起きけり今朝の春	山田 てふ
初夢や夢では惜しき事斗り	同	地、本家へも改めて行く御慶かな	山田 てふ
ふのづから春立つ門の往来	京都 町田 せん	人、墨痕はかるたにまけて屠蘇の顔	岩崎 一樂
米焚く檜の山家も今朝の春	同	動きなき富士の高嶺や初日の出	鹽野 奇零
同じ事云よと過ぎけり三ヶ日	羽前 松友 舎	大福や一と間は梅の香なども	尾張 一二三
大福や一と間は梅の香なども	追加 無一庵	一人寐の夢美くしや賣船	軍國の光りも高し初日の出

初空や戦捷國の旭の光り

井戸端で御慶申しぬ裏長屋  
年玉や年々殖える得意先  
破魔弓ややがて御國の名取草  
九重に鶴一と聲や初日の出

ハイクラ ツノル

ミナサン ワタシワ キゲンセツノ オユワ

イニ ハイクラ ツノリマスカラ ゴサンセイ

ノオカタワ ドーカ オクツテ クダサイ

テンチ ジンノ 三メイニ ピケイヲ アグマ

ス

チユ一イ ナサルコト

一、カダイ サクラ、ツバメ、キゲンセツ、

一、シメキリ 一ガツ バツジツ カギリ

一、ヒロー 二ガツ モシクワ 三ガツノ ホ

ンシノ ヨハクヲ カリテ

一、エラブヒト ラクテンドー ガクヨー

一、トマケショ トーキョー・シ コイシカワク  
トーキョー モー・ア ガツコ一 ウチ ヒ

ライワガクヨー アテノ コト

一、コノホカノ コトワ フレー・ベルカイ ハ

イクキティイニ スコシモ カワラナイ

## 白菊

(甲府市魚町小林靜軒方)  
すみれ會詩稿

跡部さと子

あらしさわぐ高ねも晴れてふもとぢのむら霧わた  
るその朝ばらけ

一本の白菊いつか匂ひつゝ袖にかつちる有明の月

手折らむと足つまだてし少女子の玉手はづれて散  
鶴丸千代子

るもみちかな

しきかな

六十二

秋山きん子

夕暮をなにとはなしに悲しくてまたもの思ふ秋風のあと

村松竹の

小山なすかばねふみこえ血潮ながす川うち渡り進むますらを

西川静江

紅葉匂ふ山の下路日は落ちていよ／＼しげし村雨の音

年若き妻を遺さつる奥津城の遼陽あたり風又寒き夕暮を空美しき椅子山のあたらもみぢば散ることしげき

をちこちの紅葉の色に誘はれて家路も漫ろ日は暮れむとす

村松下枝

村雨は止し稍にふく露をはら／＼散らす秋の朝

風

功はくちじ幾千代  
いとけなき幼子さへも戦死者の高きほまれに注ぐ  
今日あはれ

長坂きよ子

とがのこゑ火づつの音もきゝ馴れて露營の夢の美

跡部富士子

きりとす聲さへかれて寒き夜をひとりつれなく

なきあかすあはれ

さゝやかな庭のをちこちさまよひの少女の袖に萩の花ぢる

山寺の庭の萩原露ふちて若き御僧のたもとぬらしけり

青木とし子

夕暮の鐘の音微か文の窓にあはれを添へてさびしかりけり

文の窓にはら／＼かるもみぢ葉は今宵を何のたよりなるべ

さくら  
みさは

汚れつる世をや忘れて母のみ許清き里わに行かまく今宵（ある夜なき母を憶ひて）

梨子

かなしともまた樂しとも見る人のこゝろ心に澄める月かな

いく子

益良雄を波止場にふくる夕ぐれの漫るにさむい冬の黒潮  
虫の音もいつか枯れ果てし秋の野に誰ぞやまねか  
む尾花ほすき

梅子

子

しづの男も歸る山路の夕紅葉ひと枝を折りて家づ

とせむ

山寺のかねの音わたる林かげふち葉さらさら夕暮

さむし

薄紅葉

さだ子

母の入

いかにせまし今日を訪ひ來し草に木に雨よりしげ  
き露の白玉

たつ子

美しく霜をしのぎておのれのみ笑みて匂へる白菊

の花

山吹

龍田姫はらふ秋やおもからむ秋の野末に雨細う降  
る



聴子

夕かれは  
行く雁の羽袖しばしを兎にも角にも君がみ許に朝  
づて遣らむ



わづらひのつらき臥戸の遠近をねに行く鳥三つ四  
つ幾つ  
夏漫る秋さへいつか風あらき冬の夜さむをひとり  
物思ふ

夕かせにもろく落ちつる木の葉さへ眞心の色はな  
ほかはらざり



ふもひわぶ思ひに今日くるしきを人住ひさとに言  
づて遣らむ

秋の日、考妣のみ墓にままで  
つねを

山の紅葉やどの軒端の其れならば折りても人に見  
せましものを

ふもほへど手向しえぬ罪の子に一枝は許せ小萩

むらさき

いくもる重へだて呼ぶごと妣のみ聲ひびき木枯奥  
津城どころ

夜すがらをかへらぬ夢に待ちわびて見出でし星を

また失ひぬ

さむくつらき風に木枯たゆたへなこのれくつきに  
考ねむります

白露の今朝ときめて消えて行きてやがてあとなく  
て我ればろ也

ゆくべくは行かるべき路漫ろにて宵の村雨また強  
うなりぬ

くさむらに虫はすだけど物し言はぬ考妣こひしこ  
の草むらに

時としてわらぬ行手に迷ひては歎つもふろか我が  
世ひとの世

### 保育者のため

#### 行進遊嬉について

中村五六

此處に行進と云ふのは、マーチングの謂にて、  
一般にはマーチと稱へ、運動遊嬉の一種として、  
諸所の學校や幼稚園にて廣く行はれるものな  
り。其實演の方法は、種々あれども、幼稚園に行  
はるゝものは數多の幼兒を一行或は二行となし、  
教師其先頭に立ち種々の動作をなして、幼兒に之  
を模倣せしめながら行進するものにて、行進中の  
動作は、手を拍ち又は相摩すること、腕を前方或  
は左右に伸出し又は之を伸縮すること、手腕にて  
翼ばたきの眞似をなすことなどをありて一定せず、

唯幼兒に出來得べき如きものを、教師其時の意に

よりて撰むこと多し、故に未だ深く其利害得失を

考究して實施せるものにあらざるが如し。先頃、

米國幼稚園雜誌を見しに適々此問題に關する記事

あり、考究の價值あるものと思はるれば、茲に之

を參照して一二言を費し考究の資に供せんとす。

凡そ事物には目的方法あるを常とす、目的定まりて方法之に協はざるべからず、今や幼稚園幼兒に行進をなさしむる目的如何、先づ之を考究して然る後其目的を達する方法を論定すべきなり、而して行進の目的は、

三、歩行を容易にし且つ優美ならしむること。  
右の三項に歸すべし。  
行進の外なる種々の運動は、右の目的を達するに役立たざるか、多くの運動は其種類如何を問はず、靜坐の後之に移るときは、快感を與へ有益の變化となり、又跳び躍り手を拍つなど大概の運動は、所謂律動的運動となるを以て、前に擧げたる目的の第一二項は之を達すること難からざるが如し。然らば行進は第三項の目的を達するに於て、相優る所なかるべからず。

抑々歩行は唯足のみにては未だよく遂ぐること能はず、宜しく全身統合して働くによりて成るものなり、其中にも腕の助を與ふること頗る大なり、故に歩行の際は手腕に他の勞を課することあるべからず、若し夫れ歩行中手仕事をなすときは、其の

一、談話歌唱或は手技等にて坐して保育を受くることより精神身躰に緩和を與ふる爲に運動に移らしむること。

二、幼兒に必要な律動の感念を養ふこと。

人の態度醜様を呈することあるは、少しく觀察力に富める人の容易く發見する所なるべし、依て腕は肩より自由に繋りて、左足動くときは、右腕は前左方に振り、右足進むときは、左腕は前右方に振りべく、又腕は肩より振りて、臂より振るべからず、斯く自然の態を保ち、腕を肩より振るときは、身體を推して前方に進むこと大なるのみならず、運動を易くし、自然に合ひ少しも所謂無理なる所なきに至るなり。

凡そ人の身體は其重心稍々後方に偏す、故に全體の重みは自ら踵に落つるの傾向あり、歩行に際しては、身體の重みを少しく前方に進めしむへし但し臀部を後にして胸下に重點を持たしむるの心持あるへし。

又人の歩行に輕重の差あり、是は其人の體重中に

關せず、足の使ひ方による、歩みの重き人は足を上げす踵のみにて體重を支へ、一步毎にかゝどを地に打つの傾あり、之に反して歩みの軽きは、足を高く上げあしささとかゝどとを同時にふみつくるの習わり、足を上げて歩むは成人には難事なり故に幼時より、其習慣を養ふの要あり、例の古來何流など云ふ引きずり足は宜しからず、時には馬のだく(高き小足にて歩む)を習はしむべし、又手を體の或部に固着し、或は運動をなしながら歩ましむべからず、これ己に述ぶるが如く、歩行の際は、腕は既に一の役を務むるものなれば、其上に他の役を命するときは、先務の懈怠となり、しがつ身體の調和を害するに至り、顯はれては其人の態度品格を損することとなるなり。

右述べし所によりて、戒心留意以て行進を練習。

するときは、歩行を輕易にし、且つ優美ならしむるに至ることを知るべし、然らば手腕の運動は全く之を禁すべきかと云ふに、決して然らず、是は宜しく行進の前後中間に靜に立てる時に於すべし、行進中手を拍つは幼兒の喜悅を増すと云ふものあり、眞に然り、然れども歩行中に之をなさしむるを必要とせず、其前後に於て此喜悅を享けしむることを得べし、幼兒には多種の動作を同時になさしむるよりは、線的に連續してなさしむるを以て、自然に合へる仕方なりとす、

要するに、行進と同時に手の動作をなさしむることなく、一段の注意を以て之をなすときは、歩行輕快優美となりて自ら其人の風采をも高むるの効あること疑なし、幼兒保育の任に當る方は、實際に試みられんことを望む

東基吉君の幼稚園案内は、次號から續載します。

### 予が幼稚園

市川源三



世が開化したとか、社會が進歩したとか、人間が發達したとか云ふのは、世間が全く一變し、社會や人間の根抵から變化したと云ふのでは無い。唯、もとの狀態に或るもののが加はつたと云ふのに過ぎぬ。即ち野蠻と云ふのは、白粉や紅をつけぬ人間開化文明と云ふのは白粉や紅をつけた人間と云ふに外ならぬ、言ひ換へて見れば、開化=野蠻+X

であるから、開化を組織する一大要素は、慥かに野蠻そのものに、相違無い。それ故、野蠻的要素の缺乏した社會や國家は必ず、衰運に向ひたもので、野獸的傾向の缺乏した人間は死に瀕したものと云はねばならぬ、早い話が、戰爭だ。戰爭は全く野蠻的行為だ、宗教家や或る一派の道德家や、又は社會主義の人から見たら、これほど眞理的行為は無からう。けれども、如何せん戰爭に負けては折角の文明もこれを扶植し發達させやうが無い。よし人間同士の戰争が無くなつたところで、他の動物との戰争や他の自然物との戰争は永久に跡をたつものでは無からうと思ふ。そこで、吾々は成るべく野蠻的要素の保存發達に注意せねばならぬ。教育は野蠻を開化にし、野蠻人を文明人にするのであるとは、普通に考へられるところである。

が、これを誤解して、教育は兒童の野蠻的傾向を撲滅することであると思うては大間違である。ところが、事實この様な誤解を抱いて居る人が多い様に思はれる。殊に、今日の幼稚園教育はこの誤解の上に經營されてゐるはすまいかと思はれる。否、萬々その様な誤解があるので無からうが、保育その宜しきに適は無いで、人をして誤解して居るであらうと思惟せしめるのかも知れぬ。とにかく、喜ばしい現象では無い。そこで、自分は平生から思ふて居る。誰かが資本を出してくれたなら、東京市に一大幼稚園を建て、見やうと。今、その設備と組織との大要を述べやう。尤も細い點に於ては或は變更するであらうが、大体に於ては變更することは断じて無いつもり。

一、敷地、凡そ二萬坪ほど欲しい。この二萬坪の

中央一千坪ばかりが池で、その周圍八九千坪が平野、平野の周圍一萬坪ばかりが山谷丘陵を築くつもありである。然して、その山谷に水道を導きて噴水を造り、その水は流れて川となり、池に入り、池の水は再び流れて川となり、山谷を過ぎて敷地以外の川或は海にそぐと云ふ仕組にするのである。

一、草木及鳥獸等、その山には普通吾々の目に触れる様な草木を植ゑ、又野獸を放飼ひしておくその平野には、普通の草木を植ゑ、又家畜を飼うておく、そしてその川と池とに普通吾々の食用にする位の魚介昆布類を養うておくのである。

一、校舎、と云ふほどのものは入用でない。只建物があればよい。その建物も建物らしいほどのものは無くてもよい、池の邊には海士の苦屋、平野

には賤が伏屋、丘陵には草の庵位が各三四軒あれば十分である。但し、平野にある一軒丈は寒暑を防ぐ準備があることを要する。これは、病人を休養させることであるから。その他は、疲れたときの休憩所、雨天の集まり場所たるに過ぎぬとする。

一、園児、の數は百人か百五十人。年齢などは現行規定と同様でよい。但し、組は一定しておかねをり／＼必要に應じて組別をするのである。衣服は股引と法服、帽もかぶらず、履物も穿かず。勿論夏でも洋傘をささず、冬でも襟巻、足袋、手袋を用ゐることは無い。但し、食物は上流社會で用ゐて居る位なものは與へることにするが、それは、その川、その池、その平野、その丘陵から漁獵したのを用ゐるのであると定める。五穀菜菓も

その通り。

一、保母、男一名、女一名、その外に女醫一名。  
男は高等師範學校卒業の程度、女は音樂と踊る舞  
さへ出来れば、その他はまつ必要は無い。女醫は  
保母の資格があるのは勿論、少し話の上手なので  
無くてはならぬ。

一、科目、科目は海事陸事山事の三つにわける遊  
戯とか談話とか音樂とか手技とか云ふ別は立て無  
い。尤も各科に於て皆遊戲談話音樂手技等の仕事  
は無いでは無い。

一、保育の状況、まづ右の通り定めておいて、  
始業時間が來ると、全生徒を海事組、陸事組、山  
事組に別ける、そして教授の場合には男教師がそ  
の受持となり、練習の場合には女教師がその監督  
をするのである。そこで、海事組は漁りをする。

陸事組は耕作と飼畜とする。山事組は狩りをす  
る、午前十一時になると男教師の指揮の下に、皆  
一同集まつて遊戲をする、それも成るべく競争遊  
戯である、さて皆が漁りをし狩りをして得た獲物  
は、その間に料理され、正午には自分等の獲たも  
ので佳味を食することが出來ると定める。この間  
に負傷者や病人があれば、例の女醫がその治療に  
任ずるのである。醫者を態々ふくのも、割合に危險  
な事業、過激な遊戲をなさせるから、慣れた後は  
ともかく、始めの間はどうしても、病人や負傷者  
が出来るであらうと心配するからである。夕にな  
ると皆集まつて食事をし、その後唱歌をうたひ、  
踊ををどり舞を舞ふので、それが終れば各自自宅  
に歸るのである。こゝに寄宿舎や教官の住宅など  
はあかぬ。

以上の組織設備及び保育法によりて保育された子供は、さて、どんな子供になるであらう。業務に勤勉な、獨立自營の精神に富んだ、遠大の思慮を持つた、探險事業を好み子供になるであらう。さてこの様な子供は戦場に立つては必ず勇者となり、學界にあつては、必ず發見發明をする活学者となるであらう。

## 神戸市出征軍人遺族兒童 保管所實況

兵庫縣幼稚園 標 本 常

國家の安危を双肩に荷ふて出征せる我忠勇なる軍士をして、内顧の憂なからしめむには、其の遺族をして自動自活の道を與ふるに如かず、之をなすは我等留守居せる國民の義務なればと、婦人奉公會では彼等がどんな生計を營んで居るかを精密に調査されました處が、幼ない子供がある爲意の如く働く事の出来ないものが非常に多い事を發見されました、こゝに於て同會は兒童保管所なるものを創設して畫面子供を保育して一つには獨立自營の道を與へ尙進んでは間接に社會教育の一助たらしめる事を期し、即ち本年

六月を以て市内に二ヶ所之を開始されました、一つは葺合部八幡社内、一つは神戸部播磨町佛通寺別院内に、他の一つは藥仙寺内も借りて開始されました、總計三ヶ所出來て居りますが尙擴張せねばならぬ有様で御座います、然るに佛通寺の分は非常に狹隘を告げますので本月二日に補社内在郷軍人會場へ移轉せられました、以上三ヶ所に付て取調べました事項は別表の通りあります、拵三ヶ所の兒童とも朝は明くるを待ちかねて來りますれば直ちに入浴せしめ、同所に備へ付けの清潔なる着物と取かへ眼の悪きもの或は病氣あるものにはそれく手當を加へ、最初のものは「ハンモック」に入れて牛乳で育て、居られます、其他の食事は蓋板と夕飯とを與へ、お菓子は午前午後に壹回宛與へられて居ります、最初此事が議決された事を兵庫、神戸の兩幼稚園長が聞かれまして此舉をして一層完全に發達せしめたいと色々協議されました結果、葺合部へは善隣幼稚園より、藥仙寺へは兵庫園より補社内へは神戸園、聖家族園より保母が一名或は二名宛交る、來つて幼稚園的保育を施して居ります、何れも中以下のもの斗りですから初は母親達に於て十分安心が出來かねたものと見て僅が兩方で十五六名の申込もありましたが、熱心に全く献身的に親切にお世話されるありがたみがよく分つて參りましたので續々依託者を増し不足を告げました、幼児も亦隨分驚くべき舉動言語もありましたが追々成績がよく樂んで遊嬉もすれば唱歌もうたふ様になりました、此の頃は幼稚園の先生々と非常に慕ひまして余程秘密な問柄となりました、戰争にちなんだ談話などは大

人	室	神戸市出征軍人兒童保管所實況報告
數	所在	神戸市内
四	地	兵庫
拾	外	櫻社内
壹	運動場	藥仙寺内
人	板數	葺合村
參	間	八幡社内
拾	人	武
人	參	間
六	人	人

層喜びます。皆さんのお父様や兄様はと尋ねますとまわらぬ舌に「ドシャ」討ちに、私のおとつさんは騎兵です、いや砲兵ですと語り合ふ様は誠に可憐で御座います、身体上に於ける精神上に於けるお世話が遺憾なく施されて居ります、これを觀まする老人達は文明の御代とは申しながらありがたい事です、これでこそ軍人も一すぢに御國の爲めに盡せますと感涙にむせんで居ります、戰地からも段々感謝狀が参りまする、内外人は熱心に同情を表し寄送の物品も少なくはない様です、母親達も今は安らかに或は行商に或は會社にそれゝ適當な職を得まして救助を辭退し喜んで働く様になりました。

我國近年教育の進歩著しきに比し、獨り保育事業の歩足運きを鑑みし我々保育者も、今日其の機を得て我國從來の幼稚園とは其の趣を異にすれども、出征軍人兒童保管所が各地に設置せられたれば、社會が保育の必要を認め、又大に注目せらるゝ時に際し益々保育の研究を積みて着々其功績を全國に顯はすを希望するものなり。

## 大阪の保育界

十一月二十六日(土曜)大阪市保育會の臨時總會を東區汎愛幼稚園に開き、會するもの百數十名、中に男子十名許あり、此園は夫の立派なる愛珠幼稚園の建物に譲ざる輪奒壯麗の園舎にして、數年前の新築に係り數箇の保育室に遊戯室、保母室、應接所、陳列室等各整ひ、庭園も一坪百圓を超ゆる大阪船場の眞中。割合には手廣に得られ、爰には多數の草木あり小池あり、小池には噴水を設け、又庭隅に小鳥と兔とを飼へり、參集の人も夫も是やを見物し批評し合へる中、時刻(午後一時)となりて樓上に至れば爰は百疊敷許りの廣間にして、正面に四季の草花の大図を掲げ、會長席の

兒童年齡	平日		週		月		年		經費	
	最長	最少	均出	出席	當日	當周	當月	當年	十月分	全
壹	壹	壹	參	拾	五	圓	參	五	七拾壹圓四拾七錢	全
貳	貳	貳	拾	貳	五	圓	拾	五	五拾壹圓余	
歲	歲	歲	人	人	人	人	人	人	八拾六圓拾參錢六厘	
壹	壹	壹	人	人	人	人	人	人	入	入
貳	貳	貳	人	人	人	人	人	人	入	入
歲	歲	歲	人	人	人	人	人	人	入	入
八	八	八	人	人	人	人	人	人	入	入
歲	歲	歲	人	人	人	人	人	人	入	入

側には黄菊白菊取交したる挿花あり、總がて開講となるや大村會長（女子師範學校長幼稚園事業擴張の件、軍人幼兒保管の件會

則改正の件に就きて特に臨時會を開きたる旨を宣告し、順次議題

に上せたが、會則は會員の集まりには主として保育問題の實際を研究することとし、小六かしき議事討論は四十名の當議員を選みて一任するに改正せんとするものにて、細目に就きて議論多岐に

分れしが、結局大体を原案の如くに決定し、幼稚園擴張案（管で東氏の大坂みやげに其細目登載あり）軍人幼兒保管の二件は右常議員會の議に附すこととなし、夫より一同階下の遊戯室に移り四區の保姆各其研究の遊戯を持寄りて演習したり、即ち第一に北區は淺尾みつ子の風琴によりて大寒小さむ、第二に東區は小倉むめ子の洋琴によりて庭の落葉、第三に南區は奥野とも子の風琴によりて雀、第四に西區は志方房子影山たか子のバイオリンによりて菊と紅葉、樂隊遊びを行ひて各自に裨益する所頗る多かりき

中々整頓せるが如し。

當日は、折節、小雨降りの寒空なりしにも係はらず、會せし人々四十五名、始に食員、岸邊氏の自ら實施せられ居る幼稚園の景況等を頗る面白く談話せられ、終て、東基吉氏の幼兒の活動のさまゝなるあらばにつきて演説あり、終つて、茶菓を喫しつゝ會談數刻にして散會したり

## 會

## 報

## 會費領取（自明治三十七年十一月二十五日至十二月二十五日）

金額	年	月	日	姓	名
一〇〇	三七	九	三八、六	稻垣	實秀
一〇〇	三七	三	三七、一二	村越	じう
三〇〇	三六、三	一一	三八、八	田井	朋子
一〇	三七、一二			前田	幸作
一二〇	三七、二	一一	三八、一	宮地	榮
一四〇	三六、一	一一	三七、一二	森山	ふさ
一二〇	三六、七	一一	三七、六	海野	きみの

打寄りて保育法の研究なし、目下東區保育法研究會は男子師範學校の田村教諭を講師として毎週一回博物學を講究し西區保育會は男女兩師範學校兼務の目賀田教諭に毎週一回バイオリンを習ひ南區保育會は先頃心理學の講習をなしが今完了したれば時々集りて遊戯、手技等の研究をなす北區保育會は最後の成立なるも中々元氣にして各園を廻りて母姉との聯合協議會を開き又十一月迄男子師範學校の森川教諭を聘して兒童心理學を講習したり、今便は是丈

（しづ、投）

七  
七  
子  
と  
人  
婦

三六、一〇一三七、九  
三七、四一三八、一  
三七、九一三七、一〇  
三七、九一三七、一〇  
三七、二一三七、一〇  
三七、三一三七、一〇  
三七、一二一三八、四  
三七、九一三八、六  
三七、九一三八、一  
三六、一一一三七、一  
三七、五一三八、二  
三七、四一三八、三  
三六、一〇一三八、五  
三六、一二一三八、二  
三七、一一三七、一  
三七、四一三七、一  
三七、二一三八、四  
三五、四一三八、九  
三七、六一三七、一  
三六、六一三八、一  
三七、五一三八、二  
三七、一二一三八、一  
三七、一二一三八、一  
三六、七一三七、九

三五、一〇—三八、三	一〇〇
三六、五一—三七、一	一〇〇
三七、三一一三七、一	一〇〇
三六、一二一三七、一	一〇〇
三七、一一一三八、四	一〇〇
三七、一一一三八、二	一〇〇
三七、一一一三八、三	一〇〇
三七、一一一三八、二	一〇〇
三七、一一一三八、二	一〇〇
三六、七一一三八、二	一〇〇
三六、一〇—三七、二	一〇〇
三七、一一一三七、一	一〇〇
三七、一一一三八、三	一〇〇
三六、五一—三八、一	一〇〇
三七、一一一三七、一	一〇〇
三七、一一一三七、一	一〇〇
三七、一一一三七、五	一〇〇
三七、五一—三八、二	一〇〇
三七、四一一三八、一	一〇〇
三七、五一—三七、一	一〇〇
三五、二一三六、九	一〇〇

野佐絹小小松高古山山宮鎌甲吉演増武宮小村  
藤川野田澤木田本本田斐田澤田澤野沼田松山  
崎ゆいは梅つ萬定てきこはなたまふらきら左  
秀きろな野や壽重竹野るくとる冬みみつきみみ  
かく和らんかく

號一第一卷五第もど子と人婦

一六〇	三六、三——三七、一〇
一五〇	三六、八——三七、一
一四〇	三七、五——三七、九
一三〇	三六、一一一三七、一〇
一二〇	三七、一一一三七、一〇
一一〇	三七、一一一三八、一
一〇〇	三七、一一一三八、一
九〇	三七、一一一三八、一
八〇	三七、一一一三八、三
七〇	三七、一一一三八、三
六〇	三七、九——三八、二
五〇	三六、七——三八、一
四〇	三七、二——三八、四
三〇	三七、四——三八、一
二〇	三七、一〇——三八、三
一〇	三六、五——三七、二
〇	三六、九——三八、四
一	三六、八——三七、一
二	三七、五——三八、二
三	三七、七——三九、二
四	三六、一一一三七、一
五	三六、二——三七、九
六	三七、一一一三七、一
七	三七、一一一三八、一
八	三七、一一一三八、一
九	三七、一一一三八、三
一〇	三七、一一一三八、三
一一	三七、一一一三八、三

	1000	10000	100000	1000000	10000000
HC	1000	10000	100000	1000000	10000000
HCC	1000	10000	100000	1000000	10000000
KC	1000	10000	100000	1000000	10000000
KCC	1000	10000	100000	1000000	10000000
LCC	1000	10000	100000	1000000	10000000
LC	1000	10000	100000	1000000	10000000
LLC	1000	10000	100000	1000000	10000000

三七、一一三八、四  
 三七、一二一三八、九  
 三七、一〇一三八、二  
 三七、八一一三七、一  
 二七、一一三七、一  
 三八、一一三八、六  
 三七、七一一三七、一  
 三七、一〇一三八、二  
 三七、七一一三八、四  
 三七、五一一三八、二  
 三七、八一一三七、一  
 三七、一一一三七、一  
 三七、一一一三七、一  
 三七、九一一三七、一  
 三七、一二一三八、四  
 三七、五一一三八、二  
 三七、一一  
 三七、一一一三八、三  
 三七、一二一三八、四  
 三七、七一一三七、一  
 三八、一一一三八、一  
 三七、一一一三八、二  
 三八、一一一三八、一

# もど子と人婦

頤野しがぶ  
戸田ふじを  
南枝ちよの  
山本つる  
奈良あい  
岩下さち子  
關口たけよ  
岩村ふきよ  
福尾きよ  
安藤たか  
服部千  
山川穂た  
逢谷千  
古藤た  
赤藤た  
延安た  
山川た  
中藤た  
本川た  
高野た  
成田た  
山内た  
安東た  
山高た  
幾之丞

二〇〇  
一九八〇

三七、二二、三八、九  
三六、六一一三七、二二  
三七、五一一三七、二二

武井は  
越智みよ  
林ちよ



出人之少品目之多皆因白晝與黑晝而常此也

每月一回



月刊文藝雜誌 軒林小筆主

すみれ第壹卷第八號

(十二月一日發行)

揭載要目



すみれ

出版豫約募集

四六版形用紙精良  
插畫數種色摺美本  
  
定 價 金參拾錢  
郵稅四錢

本會が、同人作物の粹を選みて、出版せむとする、歌集甲斐が領は、來る二月紀元節の佳辰をトして、これを世に公にせむとす

日……明治廿八年二月十一日發行  
約……減價一部貳拾錢、郵稅四錢  
稿……短歌拾首以內(題隨意)

山梨縣甲府市魚町二丁目

小林靜軒方

## 發行所

すみれ

御文注は本誌の旨を記附御廣告は本誌の文注御

# なほの心

佐々木信綱主筆 第九卷第一號

一月一日發行

新書出版社

鷗牛庵瑣談

幸田露伴

いさご路

小山内八千代

十里河のはとりより

森鷗外

獨逸戯場雜觀

久保猪の吉

イブセン作につきて

大塚文學博士

琉球羽衣傳說

昇曙夢

玉手箱のぶちこわし

學海居士

萬葉集講話

木村文學博士

息災延命(小説)

江戸見坂(新體詩)

川田順

万葉の歌と古今の歌と芳賀文學博士

湖の冬(美文)

長文學士

アルペン(新體詩)

土井晚翠

みちしば(小説)

新井雨泉

新年旅

長井金風

今は昔(美文)

石榑千亦

ふ伽文學につきて

山岸巖谷

湯元がよひ(小説)

片山順

家庭三ヶ日

小山内薰

人の世(短歌)

佐々木楠緒子

露西亞の美術

八杉文學士

とこやみ(短歌)

印東昌綱

春曙夢(ダヌンチオ作)

大久保雨枝

鏡浦漫吟(短歌)

橋糸重子

艶福男(チエホフ作)

夏葉女史

ともし火のもと(美文)

佐々木雪子

ゲーテが叙事詩

三浦文學士

蓮月尼自傳(文學史料)

小原頼之

一冊拾三錢半年拾五錢

日本橋一本石ノ町一ノ竹狗會版出



# 謹賀新年

舊年は毎々御懇命を垂れられ奉謝候  
尙不相變御引立被下度御願申上候

## をさな繪葉書

印刷は美麗なる數度刷にして紙質は堅くして良し、六枚壹組定價拾五錢郵稅三紺迄貳錢多數注文又は幼稚園御用には割引をばなが家庭開業の間に愉快氣に遊べる、幼稚園にて談話、唱歌、手技、遊戲を爲せる、將た紅葉の様なる手を揚げて出征軍を送れる杯を畫けるものに有之、幼兒を持つてゐる人への贈物或は一般年玉等に最適又保姆、教師諸賢御使用ありて至極宜しさ品に御座候

## 幼稚園掛圖

（説明書添付）  
定價貳圓四拾錢小包送貨拾五錢  
談話、唱歌、手技、兼用、全六枚

我邦には幼稚園用としては是迄修身庶物の談話に供する掛圖すらなく尙更手技又は唱歌の掛圖なるものあらざるを以て保育上頗る遺憾に有之候處弊堂此度某々教育家の御勧めに従ひ試みに右掛圖を製して保姆諸賢の御參案に供し申候

▲此圖は例へば（一）金太郎の圖を示して金太郎の勇武、慈愛、孝心、健康等、修身に關する談話を試み次に猿、兎、熊、鹿及び草木に就て庶物の問答をなし幼兒をして掛圖によりて充分の趣味を感じしめ終りて（二）金太郎の唱歌を歌ひて更に徳性を涵養し美情を育成し心情を快活ならしめ後（三）繪入積木は第三恩物より成るもの、但し幼兒に能へざるも不可なし（四）繪入積木を各兒に與へて隨意に金太郎の繪圖を組ましめ（五）繪入積木は最も美麗にして効兒の眼を悦ばしむる様なせり▲用紙は模造紙の子二百斤を用ひたり堅牢他に多く類無し▲製本は一枚毎に木片を兩方より打合せあれば揭ぐるに最も便なり

（注意）婦人と子ども（第四卷十二號）大阪教育（第四號）に於ては早くも此掛圖を御紹介あり殊に過分の御褒辭を蒙り小店非常の光榮を博し、又東京其他より續々實際御使用の模様を御報あり幼兒大喜びの由被仰聞候以て此掛圖の眞價御察被下度候

## 幼稚園恩物

右は僅に三十六年一月の開業に過ぎざるも全國各御園の御引立にて追々繁昌仕り候段恭く奉謹謝候尙今後とも

御愛顧用命被仰付下度宜敷御願申上候

▲品質は先輩諸店の恩物より優るとも劣るとなし▲代價は世間一般のものよりは餘程低廉なり▲顧客に手數と費用とを懸けざる様十分注意す▲他店に有らざる繪入積木、板挿、貝排、砂遊び、花形貼紙等を販賣す

▲保育の普及を圖るには成る丈冗費を省くの要あり小店此點に最も注意し居れり

## 幼稚園恩物商

大阪市東區島町九三

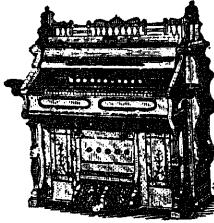
## 天眞堂主人謹白

(號壹第卷五第もと子と人婦)  
(行發日五回一月毎)(行發日五月一年十三治明)

リセ領受ヲ牌賞等壹第テ於ニ會覽博國內回五第八琴風製葉山

A decorative horizontal separator consisting of five black asterisks arranged in a staggered pattern.

山葉製險保(附風琴)



●八人組織簡易吹奏樂器一組金參拾圓  
右の外手風琴、ハーモニカ、船來フランジ  
ヨーレット各樂器附屬品、和洋音樂書  
各種郵券貳錢御送附あらば美麗なる目  
錄進呈す



○山葉製洋琴  
 金參百圓以上各種  
 舶來洋琴三百圓以上三千圓迄各種  
 鈴木製ヴァイオリン百圓以上千五百圓迄各種  
 金五圓以上上五  
 十圓迄以上各種  
 他弓箱附屬品  
 等各項

明治三十八年一月

# 新年賀

店主  
白井保男  
共益商社樂器店



# ンガルオノアビ 縫修律調

# 東京川口市三十町橋番三益社商樂器店